られてゐる。

然らば如何にしてかゝる複雜なる文樣を案出するに至つたかと云ふことであるが、それはアラビア人は先天的に數學的才能を持つてゐたのである。此のことは例へば天文學にしても、數學にしてもアラビアが最も早く發達してゐたと云ふことは文化史上明かなことで、今日吾々、否全世界の文明人が使用してゐる算用數字がアラビア數字であると云ふことによつても知り得らるゝのである。そこで更に知りたいことは、何故に彼が數學的才能を有してゐたかと云ふことであるが、それに就いては若干の假說もあるが的確なことは分らぬと思ふ。

これは餘談であるが、數學に魔方陣（マジック・スクエヤ Magic Square）と云ふのがある。これはもとアラビアに發達したもので、其の配置の數字を1から2、3……と順々に結び付けるとアラベスク系の幾何學的文樣となる。そこでアラビアの幾何學的文樣は魔方陣から出來たと云ふ說を稱へる人もあるが、それは直ちに首肯の出來ない理由がある。かくアラベスクは極度の發達をなしたので、幾何文樣は已にアラビア人に依つて研究されつくしてゐると云ふも過言ではなく、今日吾々が創作したと信じてゐる幾何文樣も、已に古くアラビア人の考へたアラベスクの中にしば〳〵これを發見し得るのである。

から草に於いても亦た同樣な行き方をしてゐるが、アラビアのから草はこれを外國から輸入したものである。元來アラビアの地が岩磐より成る沙漠地帶で草木が極めて乏しいことは既に述べた通りである。從つてかゝる地勢にあつたアラビアにから草が創案さるゝ理由はなく、それは遠くはクラシック近くはビザンチン乃至サヽンの文樣から出たので、これが前述の天才的技能によつて極度の發展をなし遂げたものであると思はれる。要するに所謂アラビアのから草はハネーサックル・オーナメント（忍冬唐草）から來たものであると云ひ得るのである。

次に回教建築と他の建築との相互關係を圖解してをく。これによつて回教建築が如何なる時代に如何なる建築樣式と交渉を有してゐたか、さうして更に如何なる影響を及ぼしてゐるかを知ることが出來るであらう。

第三章　回教建築の種類

回教建築に於いて其の主要なるものは宗教建築であるが、非宗教建築に於いても他に見られない多くの特筆すべきものがある。

一　宗教建築

イ、モスク（Mosque, Mosjid, Masjid, Musjid）。モスクは回教の寺院の謂であり、キリスト教のチャーチ（Churreh）に於けるが如きものであるが、只だ其の中に神佛の如き本尊を安置せざる特殊の拜堂である。

此のモスクのプランに關しては、時代によつてもまた地方に依つても異つてゐるので、これを一概に述べることは出來ない。けれども最も多く見られる禮拜堂の形は長方形のホール（Hall）で、巨大なるものに於いては其の內部に多くの列柱のあるのが普通であるが、小規模のものには列柱のないものもあるのである。

其の入口の正面に當る奧の壁面には必ず一つの小龕（Niche）がある。此の小龕をミフラーブ（Mihrab）と稱し、

モスクに於ける最も重要なる部分で、正に人體の心臟にも當るべきものである。さうして此のミフラーブの傍には必ず一つの高座がある。これをミンバル（Minbar）と稱してゐる。此のミフラーブとミンバルの兩者を具備しなければモスクとは云ひ得ないのである。

回教に於いては佛教に於けるが如く、多くの佛の偶像を作り、或はこれを描いて禮拜祈願するが如きには非ずして、唯一無形の神卽ちアルラーフ（Allah）を禮拜するのである。其の唯一無形の神を代表するものはメッカ（Mekka）のカーバ（Kaaba）卽ち石室であるに由り、世界のモスクのミフラーブは必ず一齊にメッカの方に向つてゐる。卽ちミフラーブはメッカの方向を示す標示であつて、信徒は毎金曜日の午後四時を期して禮拜堂に集り、ミフラーブを目標にメッカの方に向つて禮拜の勤行をなすのである。

上述の如くミフラーブはモスクの核の如きものであるが、其の形は極めて簡單なる拱龕である。然しながら此の部分が最も裝飾的に取扱はれてゐるのであつて、これ又前述した通り其の行き方は平面的である。

ミンバルは今日では用ひられてゐない。一說には國王臨御の際の玉座とも云ひ、或は說教臺であるとも云ふ。其の何れであるかは不明であるが、これには階を附して登れるやうに設備されてある。ミフラーブの前には卓があつて、僧侶は此の前に座して、回教の經典クール・アーン（Kur-An）を朗讀するのである。此の卓をヂッケー（Dikkeh）と稱してゐる。

此の他モスクの內部必須の備品としては、クール・アーンをのせる書見臺卽ちクルシ（Kursi）、タヌール（Tanur）と稱する燭臺、ツォライアー（Tsoraiah）と稱する小釣燈、ファヌス（Fanus）と稱する大釣燈等及びカンヂル（Kandil）と稱する油燈等がある。

堂の入口は多くは高き牆壁の面に穿ちたる龕子の如き拱から成つてゐる。堂內は通例中央に廣き庭があつて、其の中央に噴泉がある。間々八角の亭子を備へてゐるものもある。中庭の前後左右には廊があるが、後廊は殊に深く一見廣堂の如く感ぜられる。其の奧の壁面にミフラーブを備へてゐるのがアラボ・ビザンチン（Arabo-Bizantine）式の古代建築の典型的のものである。

メッカに於ける根本大禮拜堂、カイロに於けるイブン・ツルン（Ibn Tuln）及びアムル（Amr）の諸寺又はダマスクスに於けるワリッド（Walid）寺等は皆これである。

然しながら後期の純正アラビヤ式のものはこれとは大いに趣を異にしてゐて、中庭は著しく縮小せられ、其の周圍の廊は皆禮拜堂と變じてゐる。カイロのスルタン・ハサン（Sultan Hassan）寺は其の好例である。

波斯、印度、土耳其等の地にあるものは、おの〳〵其の國土と國民に從つて其の趣を異にしてゐる。

ロ、ミナレット（Minaret）卽ち光塔。ミナレットはアラビヤ語のマナラ（Manara）より轉じたものと云ふ。マナラは卽ち光の意であると云ふ。

回教寺院には其の一端に殆ど必ず光塔がある。元來は燈明をつけて目標としたものであると云ふが其の確證はない。

ミナレットは極めて細高き塔であつて多くは數層を成し、内部には旋回式の階段が設けられてゐる。

此のミナレットは普通にはモスクの一端に附屬して立てられるのであるが、これが單獨に立てられる場合もある。禮拜の時刻になると、僧侶は此の光塔に登つて衆徒に號呼するのである。此のミナレットの形は又千差萬別、時に奇巧人目を驚かすものさへあつて、全世界にミナレットの數は萬を以て數ふるに足るであらうが、全く同樣なものは先づ無いと云ひ得るのである。

其の起原に關しては未だ詳かではないが、バビロニア（Babylonia）及びアッシリア（Assyria）に於けるヂグラート（Ziggurat）に暗示を得て造つたものであると云ひ、其の最古の型はメソポタミアのサマラ（Samarra）に在り螺貝の如き外形である。此の型から漸次に變化して幾多の變種を生じたのである。一般にミナレットはヘジラから約百年後に始めて出來たものと信ぜられてゐる。其の眞否はこれを別として、蓋しドームと共に回教建築に於ける最も顯著なる旗幟である。

ハ、墳墓。墳墓を大別すれば四種となすことが出來る。

一、獨立した一つの建築であるもの

二、モスク内の一部に一室を設け、其の中に棺を收めたもの

三、野外に棺を暴露したもの

四、石碑、石柱の類

一は國王又は特殊の人の場合であつて、此の場合其の主室の中に棺を安置し、其の上部には必ず秀高なるドームを冠する。埃及のカイロの東郊にある所謂ハリファの陵墓、或は其の南郊のマムルック家の陵墓中に幾多の好例を見ることが出來る。これに附屬してモスクが連接する場合もあるが、全く獨立して立つものに最も偉大なる例が多い。それは多くは正方形又は八角形の建物で堅實なる壁を有し、頂には大なるドームを冠して、此の内部に棺を收めてゐる。トルケスタンのサマルカンドに於ける帖木兒の墓、印度アグラのタージ・マハール（Taj Mahal）の如きは此の種の適例である。

二は大なるモスク内の一室を以て墓室に充て、そこに棺を安置するものである。コンスタンチノープルのアヤ・ソフィア（Aya Sophia）の中に此の適例があり、歴代のスルタン及び皇族の棺が天鵞絨を以て蔽はれ、恭しく安置されてゐる。

三は皇族、貴族及び一般庶民の墳墓であつて。上は石棺を回廊を以て繞らされたる中庭の内に安置するものより、下は野外の墓地に安置するものまで幾種の等差がある。高貴の人の棺には大理石を以て作り美しく裝飾したものもある。

四は最も簡單なるもので、近世に於いては單に石柱或は石碑を建てるのみである。其の頂部には死者が生前用ひたる帽子の形を彫刻し、以て死者生前の資格を示す便宜としてゐる。其の例は土耳其に見ることが出來る。

ニ、テキエ（Tekieh）。テキエとは我が國の寺院内に於ける僧房の如きものである。其のプランは通例中央に

中庭をとり、其の中央には噴泉がある。中庭の周圍には廊を繞らし、此の廊に接して多くの小房を配す。尤も此のプランの形式はテキエに限るものではなく、一般公共の建築に共通なるプランである。此のテキエの一端にはモスクが設けられ、更にミフラーブが設けられることは已に述べた通りである。

ホ、セビル（Sebil）。セビルは水舍である。回教信徒は禮拜に先だつて、齋戒沐浴して、身を清むるの教規があるので、多くは禮拜堂に附屬してセビルがある。セビルが單獨に設けられる場合もあり、斯の場合には極めて美しい奇巧を盡した建築物である場合がある。そして內部に噴泉を設け、これより湧出する水を外部に導き迸出せしめてゐる。セビルは時に又モスクに附屬して設けられる場合もある。此の場合には外壁の外に半圓形或は直角形の小凸起を造り、これに水を導いて一般公衆の用に供してゐる。

ヘ、メドレッセ（Medresse, Madrissa）。メドレッセは學院である。即ち回教の教義を敎へる學院である。此のメドレッセより程度の低いものをクタープ（Kuttab）と云ひ、これにはしば〳〵テキエが兼用される場合もある。メドレッセの平面は前述のテキエと大同小異であるが、必ずモスクがこれに附屬して建てられる。各室は此のモスクを中心として均齊に設けられるのが普通である。其の規模の大なるもの、例へばカイロのスルタン・ハッサンの大メドレッセ及び帖木兒の建立せるサマルカンドのビビ・ハニム・メドレッセの如きものは上述せる如き平面を有するが、小規模のものにあつては中庭に替へるに屋蓋ある廣堂を以てしたものもある。

ト、モリスタン（Moristan, Muristan）。モリスタンは元來波斯語であつて、一種の病院の義である。丁度我が國の古代の佛寺に療病院がある如きで、其の平面はこれ又如上のものと大同小異で、其の中心はモスクであり、これを中心として病室が設けられてゐる。

カイロのカラウン（Kalaun）のモリスタンは最も顯著なるものの一つで、病室は男女これを區別し、醫學の講堂、圖書館等が附屬して設けられてゐる。

二　非宗教建築

イ、都城及び城門。回教諸國の都市に於いては其の周圍を城壁を以てめぐらしてゐるのが通例である。そして此の城壁の外郭に濠を繞らしてゐる。其の城門は往々高壯にして森嚴、見る目を驚すものがある。

カイロには往古六十の城門があつたと云ふ。就中ナスルの門（Bab-en-Nasr）、フトゥーの門（Bab-en-Futuh）の如きは最も有名なるものである。西班牙のトレドの日の門（Gate of Sun）の如きは實に壯麗を極めたるものである。印度のアグラの門、イエルサレムの都門の如きも亦た頗る見るべきものがある。

ロ、宮殿建築。サラセン古代の宮殿は今日では殆ど湮滅に歸してしまつたので、これを知る由もない。たゞ埃及のカイロのフアチム家の宮殿の一部が今尙ほ存してゐるが、恐らくはこれが最古の實例であらう。全部巨石を以て築き尖拱を用ひたものであるが、現存のものは僅かに其の一部に過ぎなく、內部の裝飾も亦た殆ど湮滅し古き俤を留めてゐないと云ふことは甚だ遺憾である。カイロには二三の宮室があるが、何れも後世の改修にあひ、昔日の姿を留めるが如きものはない。ダマスクスにオミア家の宮殿の遺跡があり、其の床は悉く綠色の大理石を

以てしたと云ふ。

其の中央には噴泉を設け、湧出する水は滾々として今も猶ほ涸れないと云ふ。

ペルシヤの王宮は其の規模廣大にして亭子、樓閣等多く、其の主殿は北に向つて開放されてゐたことは今日の風俗の如くであつたと云ふ。其の壁面裝飾は初期に於いては碧料瓦を用ひたが、後世に於いては陶瓦を用ひ、大理石の象嵌を兼用したと云ふ。

北亞非利加の宮殿は西班牙式に近く埃及式に遠ざかつたもののやうである。西班牙に於ける初期の宮殿は不詳であるが、セヴィリアのアルカザールの宮殿の最古の部分は第十二世紀に屬するが、其の前面は十三世紀の後半に出來たものである。最も有名なるグラナダのアルハンブラ宮殿は西曆千百三十六年に創建せられ、十四世紀の半に完成したものである。

シチリア島には第十二世紀の建設にかゝるヂザ及びクバの兩宮がある。其の內部にはスタラクタイト、釉瓦、大理石象嵌が賞用せられてゐる。

印度に於いては莫臥兒朝三代（アクバル、ジェハンギール及びシャー・ジェハン）の宮殿が今猶ほ現存し、其の豪華なりし昔日の俤を誇つてゐる。

アクバルの宮殿はアグラ附近のファテープール・シクリに於けるものが最も美しい。ジェハンギールの宮殿はアグラ城內にあり、シャー・ジェハンの宮殿はデリにあつて最も豪奢を極めた壯麗無比なるものである。其の材料は純白の大理石であり、これに各種の大理石及び寶石を鏤ばめてゐる。

以上によつて、回教諸國の宮殿建築が如何に壯麗なものであつたか、さうして如何に豪奢を盡したものであつたかが想像し得られる。其の平面に於いては各種各樣で、これを一言で云ふことは出來ない。

ハ、住宅。古代アラビア人の住宅に關しては未だ詳かでないが、其の發生の地が極西アジア、ペルシヤ、エヂプト等の地方と地理的條件が大略同じである（卽ち熱帶地であつて、雨量の極めて少い事、從つて砂塵の多き事等）關係上、それ等の地方の住宅と多くの共通點を有してゐる。

而して第七世紀以後に於ける叙利亞地方の住民は羅馬末世の住家と類似の型に由り、メソポタミヤ地方の住民は波斯式の住家を標準としてゐる。

アラビア家屋の一般的要素としては次の如き諸項を列擧することが出來る。卽ち

一、中庭をとり、此の周圍に室を排列する。空氣と光線は原則として中庭から取る。

二、男女の室を嚴重に隔離すること。

三、往來より內部を透視されない用心の爲めに入口の通路を屈曲せしめ、門扉は閂によつて嚴重に鎖す。

四、外壁の下部には通例窓を開かない。外壁の上部に於いても開放的の窓を開かない。それは駱駝上の人によつて內部を窺はれる恐れがあるからである。

五、窓は二階以上に設け、出窓とされるが、極めて密な格子をはめ、外部からは內部が見えないやうにして

ある。それは婦女が已の顏面を見られることなくして外部を眺め得るためである。

六、男女兩房に通ずべき廣間を別個に設ける。若し廣間が一つのみなるときは兩房に通ずべき戸は最大距離におく。

七、各室の配置は風の方位より打算し、常に通風の便を圖つてゐる。

八、客間は諸室と全く無關係に出入し得るやうに取る。それは普通二階であるが、戸外から直ち客間に登るので客は絶對に家庭の內部を窺ふことが出來ぬのである。一般に住宅は重層であつて、階下は石を以て穹窿の天井を造り、階上は木材を以て屋根を構成してゐる。唯浴室のみは階上にあつても必ず漆喰を以て穹窿蓋を作り、これに小孔をあけてゐる。

以上によつてアラビア家屋の如何なるものであるかが大略判つたと思ふ。然らば如何なる室が排列されるか。今次に上流家庭住宅必須なる房室をあげてみよう。

一、ファサハア（Fasaha）玄關

二、ファスキエ（Faskiye）夏座敷（中央に噴泉あり）

三、タフタポッシ（Tschtaboshi）客間（夏用）

四、マカッド（Makad）客間（夏用）

五、マンダラー（Mandarah）階下にある男房

六、カアー（Ka'ah）階上にある女房

七、ヅルカー（Dur'ah）階下の房にて從僕のゐるところ

八、リワン（Liwan）壁にそひて一段高きところ

以上は其の大略であつて、これ等の慣習は前述した如く、熱帶地方即ちエヂプト、叙利亞、波斯、土耳其及び其の附近に於けるものと共通してゐるが、其の形式手法は其の地方によつて異つてゐる。

二、オケラ（Okella）。オケラは商品の交易場である。重要都市にあつては目抜きの場所に四方街路に面する一區域を取る。其のプランは中央に中庭をとり、四方に長屋式の棟を囘らす。其の階上には下級者の居室。外人の爲めの貸間等が設けられてゐる。此のオケラに於ける交易の主なるものは駱駝の毛である。即ち遊牧の民（カラワン）は駱駝の毛を多くの駱駝に積んで持ち込んで來る。此の駱駝及び馬等をつないでおくために中庭が使用せられ、周圍の房室はカラワンの暫くの居所となるのである。即ちカラワンの來る季節は彼等の居所となり、其の他の季節は下級者の住居又は旅客の宿舍に使用せられるのである。

ホ、バザール（Bazaar）。此の種の建物は餘り諸外國に其の例をみないのである。即ち其の商品（Trade）によつて區劃された賣店の一郭である。例へば本屋なら本屋ばかり、呉服屋なら呉服屋のみの賣店の一區である。イスファハン（Isfahan）の呉服店のバザールの如きはよく其の特性を示せるものである。通例は街路の全部に屋根を蔽ひ、街路を挾んで同じ樣式の賣店があり、街の入口には往々立派な門がある。

ヘ、ハン（Khan）。ハン即ちカラワンセライ（Karawanserai）でカラワン（隊商）の旅舍である。西方アジアの諸地方で隊商が沙漠地方を旅行する際の宿泊所で官公立の旅館である。旅館とは云ふけれどもほんの房室だけの供給で、設備は皆無である。寢るべき布團もなく、六疊ぐらゐの一室に、僅かに豆ランプ一つあるのみで、極めて貧粗なものである。けれども其の規模は廣大であつて、正面の入口には大拱が開かれ隅々に必ず塔が立てられてゐる。從つて其の近景こそ粗笨であるが、其の遠景はなか〳〵雄大なものである。隊商は沙漠を旅行して此所に安眠するのであるが、彼等のひきゐる駱駝或は馬は內部の中庭に休養するのである。波斯のシャー・アバスの如きは九百九十九のハンを造つたと云ふ。シラズよりイスファハンに至る途上、アミナバードに於けるものは正八角形のプランを有し、其の徑百九十一尺餘もある。

ト、浴場。これも亦た到るところにある特殊建築物であつて、其の浴式は所謂蒸し風呂である。公共浴場にあつては其の規模廣大で男女は嚴重に區別されてゐる。浴室は穹窿蓋をかけてゐる。大規模のものにあつては、羅馬のそれの如く、アポヂテリューム（Apodyterium）、テピダリューム（Tepidarium）、カリダリューム（Calidarium）等を備へてゐる。浴場にはしば〳〵珈琲店其の他の娯樂室を備へたもの等もある。

チ、コルンバリューム（Columbarium）。コルンバリュームは鳩舍である。高く泥土を以て築き上げた圓筒形又は方形のもの等で、壁面に鳩の宿るべき無數の丸い小孔がある。これを遠くから望む時は城堡の如く見える。鳩舍は埃及、波斯に多く、鳩の飼育が極めて盛んであるが、それは其の糞を採集するためであつて、食用の爲めではない。

第四章　回教築建の樣式

回教建築の樣式に關して、埃及宮庭建築家フランツ・パッシャ（Franz Pasha）は、これを四種に分類することが出來ると稱してゐる。即ち

一、ムハメッド以前のアラビヤ建築（Pre-Muhamadan）
二、アラボ・ビザンチン式（Arabo-Bizantine）又はビザンチン・サラセニック式（Bizantine-Saracenic）
三、純正回教式（Pure Saracenic）
四、混合回教式（Mixed Saracenic）

一　ムハメット以前のアラビア建築（Pre-Muhamadan）

回教の教祖ムハメッドの此の世に出でざる以前の古代アラビア人の建築であつて、主としてアラビア半島內、殊にイエーメン地方及び叙利亞地方に行はれたものであるが、要するに原始的サラセン建築である。ガッサニード（Ghassanides）の建築も其の一である。

二　アラボ・ビザンチン（Arabo-Bizantine）

これは、回教建築初期のもので、先進國東羅馬の建築樣式をとり入れたもので、東羅馬的要素を多分に含ん

であるものである。然しながら、これとても其の地方によつてそれ〴〵地方色を出してゐる。今これを大別すれば、

一、叙利亞回教式　叙利亞地方に行はれたる回教建築であつて、東羅馬的趣味の優勢なるものである。

二、埃及回教式　埃及に行はれた回教建築で初期基督教建築の趣味濃厚なるものであるが、叙利亞式と殆ど同様である。カイロのイブン・ツルン寺の如きは即ちこれである。イエルサレムのオーマル寺、ダマスクスのワリッド寺の如きは地理的には叙利亞に屬するが、形式は寧ろ初期基督教建築の直系である。

三、亞弗利加回教式　これは亞弗利加の北海岸に行はれた建築であつて、マウル建築の一派であり、埃及式と西班牙式との中間に位する。チュニスのカイルアンの大寺、アルジールの多くの古寺の如き即ちこれである。

四、シチリア回教式　シチリアがノルマン人の占有に歸する以前の建築であつて、パレルモのチサ城及びリバ城の如き即ちこれである。

五、西班牙回教式　西班牙に起つた回教建築即ちマウル建築の前期で、西暦十世紀以前に出來たものである。コルドバの寺院、トレドの寺院等即ちこれである。

三　純正回教式（Pure-Saracenic）

前記の東羅馬趣味を脱離して一種獨特の様式即ち回教式を大成したものである。西暦十世紀から十五世紀にかけて最も全盛を極めた時代である。

一、埃及回教式　前期の様式から全くぬけ出して、固有のサラセン様式を大成してゐる。カイロのスルタン・ハサン寺は即ちこれである。

二、西班牙回教式　即ち大成せるマウル式で、これまた前期の借衣的様式を抜ぎ捨てて獨自の様式を大成してゐるもので、セヴィリア（Seville）、グラナダ（Granada）地方に此の好例を見ることが出來る。

四　混合回教式（Mixed Saracenic）

回教建築が各地方に傳播すると共に其の地方固有の傳統的素因と回教式とが混合して、一種の様式を生み出したものである。西班牙、波斯、印度、土耳其等は其の主要なる地方である。

一、西班牙回教式　基督教のゴシック式建築と回教のサラセン式建築との混合で、トレド（Toledo）に其の實例を見ることが出來る。

二、猶太回教式　西班牙に於ける猶太人がトレドに遺したシナゴーグ（Synagogue）は其の好例である。

三、波斯回教式　イスファハンの大寺は其の最も好き例である。

四、土耳其斯坦式　サマルカンド（Samarkand）に於ける帖木兒の墳墓等は其の好例である。

五、印度波斯式　即ちアフガン朝及び莫臥兒朝の式で嶄然一新式をなすものであつて、今や回教建築界に覇を稱してゐる。デリ、アグラ等の宮殿、陵墓は其の特色を表示してゐる。

六、印度教――回教式　此の様式は印度教建築と回教建築との混合である。印度教建築の手法を混用せる回教

寺の實例はアーメダバードに存し、回教建築の手法を以てせる印度教の伽藍はビドラバンに好例がある。

七、土耳其式　土耳其民族の建築様式に二派がある。

1、セルヂューク式　セルヂューク民族の一派は第十一世紀より小亞細亞にルーム國を建て、東羅馬の感化をうけて東羅馬趣味の建築を造營した。コニアに於けるアラウッヂン（Alauddin）の寺院の如きは即ちこれである。

2、オスマン式　オスマン民族はセルジュークに代つて小亞細亞を領し、次いで東羅馬をも亡ぼして其の領土を奪つた。其の建築は東羅馬のアヤ・ソフィアを模範としたもので、自ら一新式を構成したのである。コンスタンチノープル（Constantinople）のスレマニエー（Süleimaniye）、アーメヂェー（Ahmedye）の如きはこれである。

以上の他にカシュミール（Kashmir）には木造より成る回教寺があるが、極めて奇巧なるものであり、支那には支那式の回教寺（清眞寺）がある。これは外觀は支那建築の如くであるが自ら又回教氣分を示し、内容は殆ど回教的約束に由つて設備されてゐる。其の他の地方に分布されてゐる回教建築は、今一々これを列記するの遑は無い。

第五章　回教建築裝飾

扨て本講第一章に於いて、回教建築に於いては希臘、羅馬の建築の如く、壁面にモールディングを附するが如きことがないために、其の結果として平面的に裝飾することが發達したので、然かも其の壁面裝飾は最も重要なるもので、回教建築より壁面裝飾を控除するときは其の建築的價値は半減すると云ふも敢て過言ではないと述べ、更に又アラベスクはアラビ人アが先天的に數學的才能に惠まれてゐたが爲めに、極端な發達を遂げ、今日吾々が創案したと思ふ幾何學文様も已に遠くアラビア人によつて考究されてゐる場合が多いと云ふことを述べたのである。回教建築に於ける裝飾文様はそれ程重要なる位置を占めるのである。此の重要なる文様に對して少しく解說しておかなければならない。

回教に於いては唯一無形の神を禮拜する爲めに、他の宗教に於けるが如く偶像を彫刻し、或は描寫することが絶對に無い。又其の教義によつて一切の動物を彫刻繪畫に現はして、寺院の裝飾とすることを禁じてゐる。此のことはアラビア人が有した先天的數學的才能と相待つて幾何文様を極端に發達せしめ、更に外國より輸入したから革をも同様な位置にまで發達せしめたのである。

初期に於けるアラビア裝飾は比較的嚴格であつたが、時代を經るに從つて漸時繁雜となり、纖細となり、强ひて奇巧を街ふの風を生じ、趣味に於いては却つて初期のものに及ばざるに至つた。

一　文　様

サラセン文様を便宜上四種に分類することが出來る。

イ、動物　回教に於いては其の教義より動物の彫刻又は繪畫其の他一切の偶像化を禁じたことは已に述べたのであるが、實際に於いては、動物は繪畫に彫刻に織物に其の他の工藝品にしば〳〵現はれたのであるが、恐らくは波斯の影響であらう。獸類としては、獅子が最も多く、其の多くは羽翼を有してゐる。これも恐らく波斯からの傳來であらう。其の他馬、羊、鹿、駱駝等があり、往々何とも分らぬ靈獸もあり、特に支那式の麒麟を見るに至つては興味が深い。禽類としては孔雀、鸚鵡の類最も多く、其の他鷲又は鴨に類する水禽等もある。これ等は多くは巧に文様化され一種の稚氣の間に云ふべからざる興味を有してゐる。

ロ、植物は文様化せるから、草及び花紋の形に於いて現はれるものと、ほゞ寫生的に近い草花として現はれるものとがある。前者は薩珊及び東羅馬の系統から分岐したもののやうであり、後者は全くアラビア獨特のものであつて、主として陶器、陶瓦等に賞用されてゐる。前者は陶瓦等に用ひられてゐる場合もあるが、それよりも壁面裝飾として石又は漆喰の上に印せられてゐるのが常である。

ハ、幾何學的文様は東羅馬に於いて既に著しき發展をとげたのであるが、アラビアに於いては更に精練を加へ琢磨を盡し奔放自在、無規律の如くにして井然たる規律を有し、井然たる規律あるが如くして、然かも飄逸、滑脫、捕捉すべからざるものがある。眞に人をして端倪すべからざらしむるものである。

これ等の文様を分類し、これを詳說することは容易でないのみならず、此の講義では到底爲し得ないのであるが、これを要するに星形、多角形、不正形、圓周、菊花形、雷文、紐文、齒文等數十種の系統及びこれが順列錯列の混和系に分類することが出來る。

植物より脫化した草文及び花文も其の扱ひ方に由つて全く幾何學的となる。動物文様も多くは嚴正なる左右對照を保ち、これ又幾何學的に配置せられてゐる。

ニ、文字　文字を裝飾文様として用ふることは東洋建築殊に回教建築及び支那建築に於ける顯著なる特性である。アラビア文字は元來裝飾的形體を具備してゐる。殊に古代アラビア文字卽ちクーフイックと稱せられてゐる文字は洵に古代アラビア建築に調和してゐるものであり、後代アラビア文字は又後代アラビア建築とよき諧調を保つてゐるものであると云ふことは實に興味深きことである。裝飾としての文字は主としてモスクの室內裝飾中に使用せられてゐるが其の他の宗教的建築物にも勿論、非宗教的建築にも用ひられる場合がある。

二　色　彩

回教建築裝飾に用ひられた色は主として原色に近いものであるが爲めに、極めて濃艶にして華麗である。

イ、黃金色　金の適用は極めて多い。卽ち單線とし或は花文とし、又はから草として用ひられざるところなきまでに驅使されてゐる。又或は背色として用ひられてゐる場合もある。殊に文字は金色で書かれる場合が多い。

ロ、赤色　赤色の適用は又極めて其の範圍廣く、花文にしても、から草にしても赤色を伴ふことが多い。赤は黃金と相接してよき諧調を保つてゐる。

ハ、藍色　藍は最も多く使用せられてゐる色である。殊に波斯、土耳其地方に於けるものは深藍の背色を好ん

で使用してゐる。陶瓦の花文、から草等また藍色が多い。

ニ、綠色　綠は藍に次いで多量に適用されてゐる。唐草花文等の植物を表はしたものに殊に多く見られる。大理石等にもしば〳〵此の色のものを見る。綠色は多く赤色及び藍色と相接して適用されてゐる。

ホ、黃色　黃色は帶紅の濃色であつて、多くは界線及び輪廓として現はれ、或は又黃金の代用色として用ひられてゐる。

ヘ、褐色　其の適用は比較的に少く、一部分に用ひられてゐる。

ト、紫色　紫色は褐色同樣其の適用比較的少く、往々花文、から草の中に混用されてゐる。

チ、白色　白色は大理石に於いて最も多く現はれ、文樣としては主として單線となり、陶瓦に於いては背色となつてゐる。

リ、黑色　黑色も亦た大理石に現はれ、文樣に於いては單線である。

ヌ、赭色　赭色は石灰岩、砂岩等の石に現はれるの外餘り其の使用を見ない。極く稀に文樣の中に用ひられる。

以上の外多數の間色、又は原色の中でも濃淡があつて、これ等を一々枚擧することは出來ない。要するに回教建築に使用せられた顏料は藍、綠、赤、黃の四色が最も多く適用されてゐるのである。卽ち原色の傳彩であつてこれは埃及以來古代民族の通有性であるけれども、回教のものは埃及のそれの如き强烈、單調でなく、複雜なる文樣の間に各色よく配合混和され、其の刺激性は旣に中和されて寧ろ溫和豐麗の感を與へるのである。

第六章　細部の手法

これまでの講述に依つて回教建築に就いて大體の理解が出來ることと思ふが、更に回教建築に於ける細部の手法に關して簡單に一言しておく。

イ、入口及び扉　入口は通例高き障壁に穿たれたる拱門であつて、其の周圍には石、釉瓦等の彫刻や象嵌を施し、或はから草文樣の彫刻等を施したるもの、或は又文字等を現はしたるもの等がある。其の扉は多く木製であるが、これ又美しく裝飾され、其の意匠に見るべきものが多い。金具等にも我が國の八双や環甲と同型の珍奇なる意匠のものがある。

ロ、柱　古代の回教建築に於ける柱は比較的簡單なものであつたが、後世のものにあつては陶瓦を以て包んだもの、石の象嵌を施したもの、釉瓦を裝うたもの、或は彫刻を以てせるもの等がある。

ハ、柱頭　柱頭礎盤等の建築的手法は其の表面裝飾の極度に發達したるに反し、寧ろ充分なる發達をせずに終つたかの感がある。それはサラセン人の不得意とする立體的彫刻の性質を有するからである。

ニ、外壁　外壁は旣に前にも述べた通り希臘、羅馬系統の建築の如く陰影の効果を期待する彫刻的手法ではなく、窓を除くの外は凡て平坦であつて、此の平坦なる面にアラベスク等を嵌入して、其の一部或は全面を裝飾してゐる。又或るものは鮮麗なる釉瓦を貼用して雄壯なる大文樣を以て全面を蔽うてゐる。

ホ、內壁　內壁の多くは床上數尺の間に大理石若しくは他の材料を以て腰羽目を造り、其の上部は陶瓦又は漆喰を以て美しき色彩を施せる文様を現はしてゐる。モスクのミフラーブの周圍は殊に華麗に裝飾されてゐて、多く文字を現はしてゐる。天井に接する部分は蛇腹をまはし、スタラクタイト等を適用してゐる。ドームを冠するときは、其の四隅を最も巧にペンデンチーブで處理してゐると云ふことは已に述べた通りである。

ヘ、床　床は多くは大理石又は陶瓦を象嵌としてゐる。或は木の象嵌を施してゐるものもあるが、何れにしても其の文様は殆ど常に幾何學的である。

ト、窓　窓は入口同様其の周圍に適當なる裝飾が施されてゐる。窓格子は一般に簡單であるが、印度回教式のものには、大理石板に複雜なる花文又は幾何學的文様を透刻した極めて精巧なものがある。

チ、天井　穹窿狀をなせるドーム天井では、唯白色の漆食塗りとしておくのが通例であるが、其の上に文様を畫いたもの或は陶瓦を以てこれを蔽へるもの等もある。其の下端に文字をあしらつたもの等もある。天井が木造の場合は折上天井としたものも垂木を露出したものもあり、文様、彫刻等は隨所に用ひられてゐる。

リ、ドーム　回教建築に於けるドームは一種獨特なものであることは已に述べた通り最も重要なものの一つである。埃及回教式のものに於いては其の表面に一面に花文、或は幾何文様を施したものなどもある。又縱に界線を入れたもの、界線の捩れたもの、網代形のものなどあつて、一々これを擧げて說明し得べくもない程である。ドームの頂上には例の團子の串刺しの如き寶頂を冠してゐるが、其の絕頂に半月形又は日月の形を冠したものが著しく目立つ。

ヌ、ミナレット　ミナレットに關しても既に述べたのであるが、此の奇妙なる高塔の表面に釉瓦を貼用したものがある。若し數層をなす場合は每層其のプランを變ずるものがあり、其の各層に奇拔な高欄を繞らしたる樣を備へてゐるのがある。其の表面裝飾文様も亦た甚だ勁健なるものが多い。而して此のミナレットの瘦秀なる姿はドームの肥滿せる形と面白き對照をなしてゐる。

以上述べて來たところは東洋三大建築系統の一つなる回教建築史の總論であるに過ぎず、各論には全然觸れてをらぬのである。元來本講の目的が東洋建築の概說を述べると云ふことにあつたがために、又極めて少き紙數にこれをまとめる必要とのために、其の委曲を盡し得なかつたので、不徹底なる解說に了つてしまつた部分も相當あらうと思ふ。それは遺憾ではあるが如何ともすることが出來なかつた。諸君は何卒これを諒とせられ度い。

本講の冒頭に述べた通り、回教建築は建築史上に於いては東西建築の連鎖であると云ふ極めて重要なる位置にありながら、且つ又其の世界に及ぼせる影響の極めて廣範であるにもかゝわらず、歐米の文化と緣が遠いと云ふ誤解から、今日まで歐洲の諸建築に比しては極めて不充分なる研究しかなされてゐないのである。從つて多くの未解決の部分を殘してゐるので、それ等の調査研究は我が建築史界に殘されたる廣大無邊の分野である。

回教建築終

薩珊建築

薩珊建築

一　總論

薩珊建築とは薩珊朝の波斯に行はれたる建築なり。薩珊朝は支那後漢末より唐初の間に於いて波斯國として知られたる西亞の强國なり。初めアルタキセルキセス（Artaxerxes）（又アルダシル（Ardashir）と稱す、西暦二二六―二四二）なるもの安息を亡ぼして薩珊朝を建て、爾來國威頓に揚り、常に西ビザンチウム（Bizantium）帝國と雌雄を爭ひて互に勝敗あり、歷代の諸王中最も顯著なるものは、セルビスタン（Serbistan）を建營せるシャプール（Chapoor）、又サポール（Sapor）第二（西暦三〇八――三八〇）、フィルザバード（Firouzabad）を築造せるペロセス（Peroses）又フィルズ（Firouz）（西暦四五八――四八二）、クテシフォン（Ctesiphon）を造營せるホスルー（Khosrru）、又ホスロエス（Khosroes）第一（西暦五三一――五七九）、マシタ（Mashita）及びラバートアモン（Rabath-Ammon）を創建せるホスルー第二等にして、一時は埃及を侵略するに至りしも、國運漸次に傾き回教徒の襲來に逢ひて終にこれに抗する能はず、援を唐に乞ひしも納れられず、建國より年を歷ること四百十五年にして終に回教徒の亡ぼすところとなれり（西暦六四一）、實に我が朝舒明天皇十三年にして、唐の太宗貞觀十五年に當れり。

薩珊建築は一般に希臘羅馬系統に屬するものと認めらるゝも、實は一種特殊の樣式を備へ、未だ俄かに希臘羅馬系に加ふべからざるものあり。蓋し古代波斯及び亞述利亞の樣式隱然これが根柢をなし、希臘趣味に傾きたる條支、安息、東羅馬等の樣式これに參與し、これに加ふるに國民固有の趣味を以てし、終に特殊の樣式を大成せしものなるが如し。今其の建築の特性を擧ぐればほゞ左の如し。

薩珊建築は宮殿を以て本位とす、蓋し薩珊は拜火敎國にして祭祀は唯壇を築きてこれを行ふに過ぎざるを以て宗敎建築の發達を見るに至らず。

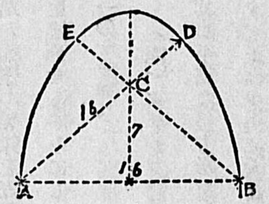
宮殿の平面は殆ど常に長方形をなし、中に中庭あり、中庭を圍みて房室を配す。光線は多く中庭よりこれを採り、外壁に窓を穿つこと稀なり。穹窿の屋蓋に小孔を穿ちて光線を採る。

外壁は石及び煉瓦を以て築き、石灰モルタルを用ふ、然れども未だ曾つて古代波斯の如き釉瓦を用ひず、壁面には半柱を出して列拱を作り、拱内は龕をなすことあり。軒の上には雉堞形の裝飾あること猶ほ古代亞叙利亞建築の如きものあり。

天井には穹窿を賞用せり、其の形或は筒狀なることあり、或は球狀に近きものあり、然れども其の斷面形は殆ど常に楕圓に近し、これ最も特殊なる事實なり。入口、窓等の拱の形また殆ど必ず正圓の弧を用ふるものなし。

柱の制は大いに希臘羅馬系に似たり、否寧ろ東羅馬式に酷似せり、然れどもまた好んで柱頭を有せざる柱を用ひたり。入口及び窓等の拱は多くは一種の楕圓類似の曲線をなせり、これ薩珊建築の最も特異とするところなり。

左の一例はクテシフォン宮殿の大拱なり。即ち拱の幅ABを十六分し、其の七を高としてABCの三角形を畫きCD・CEの延長線を作り、A、Bを中心としてBD、AEの弧を得、次にCを中心としてED の弧を得、三弧相連りて拱をなす、而して其の構架法は、拱周の煉瓦若しくは石は發光狀の繼手によらず、ABの起點より若干程までは水平に重疊し、拱の幅漸く迫るに及んで始めて發光狀に配置するを常とせり。



裝飾文樣はまた特異なり、其の最も賞用せる手法は拱の周邊等に施せるW紋なり、軒にも亦た煉瓦を水平に犬齒狀に突出せしめて適用せり、或は凸字形の軒飾りを用ひたり。から草文また甚だ奇異なり、其の遠因は亞叙利亞にありて近く希臘羅馬的影響を示し、ハネーサクル(Honeysuckle)の變態及びアカントス(萬苕 Acanthus)の一種あり、又葡萄から草に雙對の鳥獸を配合したるものあり、アラビヤから草の先驅たるべき特種の草花あり、幾何學的文樣には東羅馬趣味の線條錯綜せるもの、或は純潔にして稚氣愛すべきものあり。

二　各論

薩珊建築の實例は甚だ多からず、今其の二三を擧ぐれば左の如し。

（一）チグラネス（Tigranes）の宮殿　亞細亞土耳其のクルヂスタン（kurdistan）に在りて、チグリス河の上流

に臨めるヂアルベクル（Diarbekr）にあり、いま回教伽藍たり、此の建築はアルメニアの王ヂグラネス（此の王は西暦七十四年、安息人をメソポタミアより撃退せることあり）の宮殿の遺趾なりと稱するも眞僞なほ明かに辨ずべからず今一般に薩珊朝の遺物と認めらる。

（二）セルビスタンの宮殿　波斯のブシール港を去る遠からざる高原の上にあり、西暦第四世紀の半に於いてサポール王の建立するところなり。其の大さは前面百三十尺側面百四十尺にして中に中庭あり、中央に楕圓形のドームあり、左右に楕圓筒の天井を有する廊あり、皆天井に小孔を穿ちて光線を採る。材料は煉瓦にして表面に漆喰を塗りたるもの、今や大破して狼藉たり（第一〇六六・一〇六七・一〇六八圖）。

（三）フィルザバードの宮殿　セルビスタンを距ること遠からず、西暦第五世紀の遺物にして洵に克く薩珊波斯の建築の趣味を表現せり、其の大さ高さ三百二十尺幅百七十尺あり、其の後部に中庭あり、外壁には細き龕子を排列せるのみにして窓牖なく、内部の壁面には今なほ僅かにスツッコの裝飾を殘せり（第一〇六九・一〇七〇・一〇七一圖）。

（四）クテシフォンの宮殿　メソポタミアにあり、バグダードを距る東南三十英哩、チグクス河の右岸に位す。其の平面は長方形をなし、前面三百十二尺、側面百七十尺、高さは精確ならざるも約百〇五尺より百十尺に出入す、正面中央に大なる入口ありて特殊の楕圓拱を架けたり、拱の左右の壁面は數層に分たる。最下層は柱頭なき雙柱を以て四楹に分ち每楹半圓拱を架く、上層は單柱を以て五楹に分ち、更に帶を入れて上下二段に分つ、下段は雙拱を入れ、上段は三連拱を入る。第三層は十三楹の列拱より成り、其の上に細かき列拱より成れるパラペットあり。此の宮殿は今甚だしく破壞せると、正確なる實測圖なきを以て、其の細部の手法の性質を知るべからず（第一〇七二・一〇七三・一〇七四圖）。

（五）マシタの宮殿　パレスチナの死海の東方叙利亞沙漠の中にあり、方五百尺の周壁の中に宮室あり（第一〇七六圖）。此の建築に就いて古來多少の疑問あり、甲はこれを以て當時此の地方に建國せるアラビヤ族のガサニード朝の建築と云ひ、乙は薩珊の建築と云ひ、丙は薩珊の建築家の經營に成るも工匠はガサニード朝のアラビア人を用ひたるならんと云ふ。今周壁の一部殘存（第一〇七七・一〇七八圖）するものを見るに、其の裝飾には大なる鋸齒形の界線を作り、其の内に葡萄から、草と左右相對の鳥獸とを入れたり。蓋し葡萄はヘブルーより出で、鳥獸はペルシャより出で、鋸齒狀の紋は薩珊に屬す。獨逸の碩學フリードリヒ・ヒルト氏は其の著「支那藝術に及ぼせる西亞の影響」に於いて海馬葡萄鏡の起原を論ずるや、此のマシタの壁上の文様を有力なる參考資料として引用されたり。

（六）ラバートアモンの宮殿　マシタの北方二十英哩の沙漠中にあり。マシタの宮殿と共に薩珊末期の遺趾なり。其の形（第一〇七五圖）約正方形をなし中央に中庭あり、内部の壁面に美しき葡萄から、草及び忍冬から、草の變形あり、又鋸齒狀の紋あり、建築の趣味は寧ろアラビア的に近きを觀るべし。ベーデカーの案内記に此の建築を紹介して曰く「此處に珍奇なるアラビア建築あり、其の何たるを詳かにせざるも回教寺院に非ざるが如し」と、

以て其の大體を知るべし。

其の他イムムザデ（Imumzade）、タグ・エイラン（Tag-Eilan）、タキボスタン（Taki-Bostan）、ビ・スツン（Bi-Sutoun）等に趣味多き遺物あり（第一〇七九・一〇八〇・一〇八一圖）。

薩珊建築終

塔

塔

緒言

均しく塔と稱ふるものでも、其の種類は千差萬別である。直立千尺のエッフェル塔も、塔と呼ばれるかと思へば、一寸に足らぬ粒塔も、矢張り塔の一種である。巨岳の如く聳えたる埃及のピラミッドも、金字塔と譯されて塔の仲間に入れば、毘沙門天の掌の上に載せられた舍利塔も、立派な一種の塔である。形の上から見れば塔らしくないが、彼の眞言宗で使ふ能作塔、墓地に壘々たる卵塔、よく街道の傍にある庚申塔、さてはパルシーの葬場たる寂塔（Tower of Silence）などは、正當に塔の部類に編入さるべく、又形は塔に似てゐても北米のスカイスクレーパーは、摩天閣とでも譯さるべきもので、塔とは云はれぬ。日本の城に在る天守閣や、東京淺草の凌雲閣なども此の格である。

こゝに於いて起るべき問題は、塔とは如何なる建築であるかと云ふことである。塔と云ふ文字の出所經歷に就いて今これを述べないが、英語の Tower と名づけらるゝ一切の建築、及び英語の Pagoda と稱する東洋に特有なる宗教建築全部を包含する外、日本に於ける佛教の墓標及び供養の爲めに作られる佛式の建造物、其の他これ

と同型に屬する大小各種の物件を一切網羅するので、其の範圍は非常に廣漠たるものである。要するに塔は一半は建築物で一半は物品である。建築としての塔は、一般に廣さより丈けの高い、多くは游離して立ち、主として住宅以外の目的を以て造られ、材料構造は、比較的堅實牢固の性質を具へてゐるものと云ふことが出來るが、勿論此の條件は、本篇の所謂塔に當て嵌らぬのである。

塔の分類はいろ〳〵の方面から試みることが出來るが、第一其の意義から觀て、宗教的の塔と、非宗教的の塔とに兩分するのが便宜である。何れの宗教に於いても、其の建築には殆ど常に塔が在存してをつて、最も趣味ある美しい建築として充分の價値を示してゐる。非宗教的の塔は例へば多く住宅、城、或は公共建築等に存在してゐる。又廣告の目的や、遠望及び標識の目的に成る例もあり、記念建築として造られる場合もある。併し本篇に於いては、宗教的の塔のみを取扱ひ、非宗教的の塔に關しては、一切述べないことにする。

さて塔の範圍を宗教的と制限して見れば、餘程取り扱ひが簡單になるが、併し古今東西の凡ゆる宗教を擧げ、これに屬する有ゆる塔を說くことは、實際非常な大仕事である。一寸見渡したところでも、古代埃及のピラミッド、巴比倫、亞叙利亞の神壇も既に此の列に伍するのである。佛教には窣堵婆及び舍利塔等もあり、道教には風水塔があり、回教には光塔（Minaret）があり、基督教には鐘塔がある。拜火教には寂塔がある。印度の闍伊那教にも印度教にも、それ〴〵特殊の塔があり、其の他にも詮議して見たならば、尙ほ幾種の實例が擧げられるであらう。これ等を說き悉すことは實際不可能であるから、本篇に於いては、更に其の範圍を制限して、唯佛教に屬する塔だけの說話とするのである。卽ち佛塔及び其の系統に屬する塔の話である。

佛教の塔と云へば、範圍が著しく制限されたのであるが、それでも隨分廣いのである。第一佛教は教義上から見て幾多の區別がある。從つてこれに屬する塔が各々相均しくない。第二佛教の行はれた土地は非常に廣い。土地に從つて塔の建築に異同がある。第三佛教は、上下二千五百年の歷史を有つてゐる。古今其の塔の建築に變化がある。此の教義、地方、年代の三原素が互に結び付いて、種々雜多な塔の建築の樣式を造り出してゐるので、これを詳述して要領を竭すと云ふことは、これまた非常な難事で、自分の力でやり遂げることが出來るや否や、頗る覺束なく思ふ。寧ろ更に範圍を縮め、印度の佛塔とか、支那の佛塔とか、地方に從つて記載を續けて行く方が、詳細にして的確なることを得るのであるが、併し今は一地方に限つて狹く深からんよりは、やゝ淺くとも、廣く全體を觀察して、佛塔に關する一般の解說、各地方、各年代の佛塔建築の相互の關係などの概念を得た方が、實効的であると考へたので、試みに其の方針に由つて本篇を草する次第である。

以上の趣意であるから、本篇に於いては既往の圖書に於けるやうな、個々の佛塔の傳記や、現狀の記載は試みない。これは、既に幾多の參考圖書に載せてあるから、今更これを反覆するのは愚であると思ふのである。本篇に於いては主として佛塔の原型から、無數の變化が各地方に發生した興味ある現象を捕へて、これが說明を試みるのである。各地方、各年代の塔の樣式を解剖して、其の根源を究めるのである。勿論これは自分の今日信ずるところを表明して、江湖の高教を乞はんとするのであるが、研究の不行屆と、限りある紙面の制限とで議論の徹底

しない點が多々あらうと思ふ。これは豫め諸君の諒察を願ひ度いのである。

便宜上、此處で本篇の內容の梗概を略述して置き度い。先づ始めに佛塔の原型を述べ、これを構成する基壇・塔身、相輪の三大部分が地方に從ひ、年代に由り、それ〴〵異なりたる發達を遂ぐるが爲めに、終に幾多の地方的樣式を生じたることを述べ、現今存在する幾多の塔及び塔と同系に屬する物件の形式の比較的研究を試み、終りに塔系物件の意匠及び實際應用に言及し度い積りである。即ち本篇は、佛塔の形の方面の研究の一端であつて、材料構造に關する方面には觸れないのであるから、これも前以て諸君の諒承を願ふのである。

第一　佛塔の由來と原型

佛塔の建築的說明を試みる前に、一應佛塔の由來を說くのも亦た無益では無いかも知れぬ。

佛塔を佛敎の敎義の方から說き出すと、事態頗る難義に陷る。吾人佛敎の哲學には門外漢であつて、事の眞相は充分に理解し兼ねる點が少くない。由つてこゝには佛敎哲學の方面は先づ見ないことと致し、吾人の常識で理解し得る範圍で、其の由來を記述するのである。

既に世人の普く知る如く、佛塔は梵語のスツーパ（Stupa）である、音譯して蘇偷婆、窣堵婆、私偷婆、藪斗婆などと云ひ、又浮圖とも云ふは梵語ブドハ（Buddha）の音譯であると云ふ。スツーパ又トーペ（Tope）とも云ふは地方的轉訛であると云ふ。塔婆と書くのは窣堵婆が窣塔婆となり、更にそれが略されたのであるか、或はトーペの音譯であるか、自分には判斷が附かぬ。さて其の塔婆が更に略せられて終に塔となつたので、元來塔の字には意味がないのである。

塔は意譯して高顯、圓塚、方墳、靈廟、大聚、聚相などと云ふ。要するに一種の佛敎に關する墳墓、若しくは記念建造物又は記念物件である。其の目的は南海寄歸傳には、三意ありと書いてある。曰く、一表二人勝一、二令二他生信、三爲二報恩一、併し更に適切に云へば、立塔の主要なる目的は左の三項となる。

一、墓標として

二、靈地の表彰又は事蹟の記念として

三、供養の爲め

さて立塔のことは何時から行はれたか、勿論佛塔と云へば、佛敎の起つた後には相違ないが、塔の建築は既に遠い上古から印度に行はれたに相違ない。即ち印度に於いては遠い上古から、墓標として一種の人工の塚を築く風習があつたので、釋迦が佛敎を說いた頃は、既に一定の型が出來てゐたのであらう。釋迦滅後其の舍利を納める爲めに造られた塔は、決して突如として新たに創案された形ではなく、上古より傳へ來つた普通の塔の型に由つたものと推測される。俗傳によれば、釋迦が涅槃に入るとき遺言して、其の塚の形は、下に袈裟を敷き上に鐵鉢を覆ひ、其の上に釋杖を立てた型に由れと云うたので、其の遺命に由つて出來た型が、即ちスツーパの原形であると云ふが、これは自分は信じないのである。兎に角今日現存する最古の佛塔は、彼のサーンチーの大塔（第七

一八・七二八圖）で、これは亞育王の造つた八萬四千の寶塔の一であると云ひ傳へられてゐるもので、彼の傳說の袈裟、鐵鉢、釋杖から成ると云ふ形とよく適合してゐる。卽ち下に圓いプランの基壇があり、其の上に半球體に近い塔身があり、其の頂にチー（刹又は欒）と稱する棒（露盤・傘等より成る）が立つてゐる、卽ち所謂相輪である。卽ち塔の原型は基壇、塔身及び相輪の三部より成るのである。

さて塔に關する多少の記錄を擧げて見ると、釋迦が涅槃に入り荼毘に附せられた後、其の舍利の分配に付いて爭議が起り、結局これを八分して摩揭陀、吠舍離、迦毘羅衛等の八箇國に分け、各國おの〳〵これを納むるが爲めに塔を起した、荼毘の現場にも塔が立てられた、又八大靈塔名號經によれば、所謂八大塔は第一迦毘羅衛城龍彌園の佛誕生のところ、第二摩迦陀國泥連河の畔菩提樹下佛成道のところ、第三迦尸國波羅奈城の大法輪を轉ぜしところ、第四舍衛國祇陀園大神通を現はせしところ、第五桑迦尸國の忉利天宮より降下せしところ、第六王舍城化度のところ、第七廣嚴城靈塔中思念無量のところ、第八拘尸那城娑羅林の內入涅槃のところであるが、此の內第二の佛成道のところ卽ち佛陀伽耶には、今も其の地點の上に大塔が聳えてをり、第三の波羅奈城卽ち今のベナーレス近郊鹿野苑には、其の地點と遠からじと覺しきところに、一基の古塔が現存してゐるのである。

それから亞育王は例の八萬四千の塔を造つたと云ひ、爾後佛塔の建立に幾何の隆替を見たが、これ等の塔は所謂顯敎に屬するものである。密敎所傳の塔の由來は、南天竺に鐵塔があつて、龍猛菩薩が其の中に入り、金剛薩埵に灌頂加持を受け、祕密の法門を誦持して塔門を出たと云ふ。此の南天の鐵塔なるものの形式を傳へたと稱するものは、卽ち我が高野山の根本大塔で、今日吾人が多寶塔と稱するもので、卽ち密敎の塔である。又顯敎の塔の形から出たものは、我が奈良朝以來一般に行はれた三重五重等の層塔である。

塔の形式は斯くの如く、敎義に由つて顯密の二種に區別せらるゝが、先にも述べた通り、敎義のことは自分は精知せぬところで、殊に密敎の所傳の塔に關する事件に至つては、全く要領を得ぬのである。兎に角塔の形式は實際多種多樣であり、時代に從ひ地方に由り、敎義に關し材料に伴ひ、殆ど無窮の變化を生ずるのであるが、併し其の系統を分類して見れば、其の間に整然たる秩序が發見されぬことは無い。以下說くところは卽ち此の問題の解釋である。

第二　中印度の佛塔

凡そ佛敎に關係ある物件で、苟くも塔と名の付く程のものは、其の如何なる形狀、如何なる物質、如何なる目的たるに論なく、其の根源に溯つて見れば、均しくみなこれスツーパに歸著せざるはなく、其の形は卽ち皆スツーパの變化でないものは無いのである。スツーパの原形は前章に述べた通り、基壇、塔身、相輪の三部より成るのであるが、此の三部が或は箇々に變化し或は相關聯して變化し、又其の變化が低次であり、或は高次であり、其の他特殊の原素が加はり又は減ずることに由つて、終に無窮の種類を生ずるに至るのである。

今中印度に於ける塔の形の變遷を觀察して見るに、其の最古の原型なるサーンチーの塔（第七一八・七二八圖）の

形は、其の後の時代の經過と共に漸次に其の高さを增して行くのである。換言すれば基壇も塔身も次第に丈けが高くなり、相輪も次第に複雜になつた。これはスツーパの實例に徵しても分明であるが、所謂チェーチヤ Chaitya（支提）と稱する殿堂內に安置されたる舍利塔に於いて、殊に顯著なる實例を見ることが出來る。チェーチヤの音譯は支提であるが、これは舍利塔卽ちダゴーバ Dagoba を安置して、これを禮拜する爲めの殿堂であるから、假令これが石窟である場合でも、均しく舍利殿と意譯するのが適當であると思ふ。或は塔寺と譯し或は廟寺など唱ふるのは面白くないと思ふ。さて此の舍利殿內の舍利塔は何れも小さいもので、小さければ必然の結果として丈けが比較的高くなるのであるが、それにしても時代が新しければ新しい程、丈けの高さが增大するのは顯著である。

挿圖に示すが如く、ベドサ（孟買州プーナ縣）の舍利殿の舍利塔（第七四四圖）は西曆前百五十年以上に溯るものでサーンチーの大塔よりやゝ後れてゐるが、基壇は既に異樣に高くなり、塔身はなほ殆ど半球の形である、相輪は全部の形は分らぬが著しく發育して來た。アジャンタ（ハイダラバード領アウランガバード部）の第九號窟內の舍利塔（第七四七圖）は、ベドサと殆ど同年代であると考へられるが、圖に示すが如く其の塔身は既に半球以上に發育してゐて、相輪はベドサのものによく似てゐる。ナーシク（孟買州ナーシク縣）第十七號窟內の舍利殿（第七四五圖）は西曆前百二十九年と云ふので、其の形式は殆ど前二者と同樣である。カールラ（孟買州プーナー縣）の大舍利殿內の舍利塔（第七四九圖）は西曆前七十八年と稱するもので、形も大きいが基壇は前者より却つて低い、塔身も高く無いが、曲線の性質は前者に酷似してをり、相輪の傘が存在してゐるので珍らしい。次にアジャンタ第十九號窟のもの（第七五〇圖）は、時代もずつと降つて西曆第五世紀に屬するので、其の形式も一變し、基壇は四角に面を取つたプランとなり、高さは著しく延びて表面に龕子を生じ、其の中に佛像が現はれて來た。塔身は球體に近くなり、相輪は頗る複雜になつた。エローラ（ハイダラバード領アウランガバード部）の毗首羯磨舍利殿のもの（第七五五圖）は、更にこれよりも後れて第七世紀に屬するので、一層形が崩れてゐる。大體は前者に似てゐるが、塔身は球形でなくて、蜜柑の形になつた。

舍利殿に屬するもの以外の塔は不幸にして實例が少い。彼の鹿野苑の大塔（第七二三圖）は創立以來しば〳〵改修されてをり、現在のものは第十一世紀まで降ると云ふ說がある。說の眞僞は容易に決定し難いが、兎に角其の基壇及び塔身が著しく高いのと、基壇に龕子樣の設備があるのに由つて、既に其の年代の餘程後期に屬することが分る。佛陀伽耶の大塔の附近にある幾多の小塔（第七三〇圖）や、カルカッタ博物館所藏の摩揭陀の小塔は、其の基壇が多くは四角の面取りになつてゐることや、塔身が高くなつて、其の肩が角張つてゐることや、龕子に佛像を備へてゐることなどに由つて、既に其の七八世紀よりも古くないことが分る。佛陀伽耶の大塔は更に變化したもので、直角形の基壇の上に、五基の四角な塔身が聳え、相輪の形も頗る異樣である。これは第十四世紀に緬甸人が改修して、斯くの如き異形のものとしたのであると云ふから、これは寧ろ除外例と見るが適當であらう。要するに、印度本來の佛塔の形はサーンチーの塔を以て原型と見るべく、これが年代を經るに從つて漸次に變形し、終に佛龕の如きものとなつて、元來內部の充實してゐる筐の塔が內部に佛像を納むべき房室を生ずるに至つ

た。即ち所謂南天の鐵塔式に轉化した。これを教義の上から觀れば、顯教より密教に推移したことになる。

第三　錫蘭の塔

中印度の佛塔の型を、最も純正に今日まで傳へたものは錫蘭の塔である。錫蘭は傳説に由れば、彼の亞輸迦王の時に既に佛教國となり、中印度に於いては、七八世紀の頃には佛教が衰頽して、漸く印度教化したにも係らず、錫蘭に於いては、連綿として今日まで佛教が傳つてゐるに徴しても、如何に錫蘭と佛教との關係の深いかを知ることが出來る。

序でに錫蘭の由來を一言して置き度い。錫蘭の原名はシムハラ Simhala と云ふ、シムハは梵語で獅子と云ふことである。シムハ又シンハ Singha と綴つた例もあるが、漢字に音譯されて狻猊（卽ち獅子）となつたのであると思ふ。傳説によれば、錫蘭人の祖先は獅子であつた、故に此の國を古へより獅子國（卽ちシムハラ）と呼び、其の國民を今でも獅子人（卽ち英語のシンハリーズ Singhalese）と云ふのである。併し土人は自國をランカと呼んでゐる、ランカは島の意である。此のシムハラがシハラとなりシラとなり、終に英人のシロン（卽ち錫蘭）と轉訛したのであると云ふ。

錫蘭が釋迦の降誕地であると云ふことは、勿論突飛なる虚説であるが、今も猶ほこれを信ずる人があるのは餘程可笑しい。これは元來錫蘭の佛徒が、土地を神聖にする爲めに揑造した虚言であるが、然し錫蘭に佛教の傳來した物語は興味に富んだものである。今詳細のことは述べいが、錫蘭國王天愛帝須（デヴァーナンピヤ・チッサ Devanampiya Tissa）が、其の都城阿耨羅陀補羅（アヌラダプラ Anuradhapura）に君臨してゐた時、中印度摩揭陀國の亞輸迦王が、其の王子摩哂陀（マヒンダ Mahinda）を錫蘭に遣はして、佛法を傳へしめた、天愛帝須は摩哂陀と會見して問答の結果、深く感服して佛教に歸依した。やがて亞輸迦王の王女僧伽密多（サンガミッタ Samghamitta）が、菩提樹を携へて、更に遙るゝと錫蘭に渡つて佛教の弘布に盡瘁した。こゝに於いて錫蘭は、終に堅實なる佛教國となり、爾來堂塔伽藍の建立が盛んに行はれたことは、今日の阿耨羅陀補羅の古趾に、累々たる巨塔や大寺の散在するを見るも、想像することが出來るのである。

さて錫蘭に於いては佛塔をダガーバ Dagabe と云ふ。今其の形を考へて見るに、錫蘭塔には二種の型がある。第一は大伽藍の中心となる大塔で、直徑數百尺に及ぶものがあり、其の全體の形狀は中印度のサーンチーの古塔によく似てをり、基壇も割合に低く、塔身は殆ど半球體をなし、露盤は鮮明なる四角な輪廓を示し、相輪は上部に細まつた圓筒の形を爲してゐる。第二は彼に對して小塔と名づけて置くが、これは直徑數十尺に過ぎないもので、基壇は割合に高く、塔身は多くは半球狀でなくして、半楕圓體を縱に立てたやうな形であり、露盤は比較的顯著であるが、相輪は急に上に向つて細まるので、殆ど筍のやうな形である。又此の塔の場合には、必ず塔の周圍に幾重かの列柱がある、多いのは四重までの實例がある。これは柱の上に隨時材木で造つた梁を架渡し、其の上に布を張つて日光を遮斷したのであらうと考へられてゐる。次に少しく錫蘭塔の實例を擧げて、これを説明して見

よう。

其の前に先づ錫蘭の歴史の分期を一言し度い。第一期は阿蘭羅陀補羅時代で、西暦前四百年頃、此の土地の歴史が明かになつてから、西暦第八世紀の終りの頃、此の帝都を捨て東南ポロンナルワに遷都したまでの期間である。第二期はポロンナルワ時代で、こゝに帝都が遷されてより、第十六世紀の始めカンデー遷都に至る期間である。此の時西暦千五百五年に、葡萄人が始めてコロンボに上陸し、千五百九十六年に全島葡萄人の勢力範圍に陷り。千六百五十八年に和蘭人の手に遷り、更に千八百十五年より英國の領土となつたので、第十六世紀以後は即ち第三期となるのである。要するに第一期は古代佛教時代、第二期は中古佛教時代、第三期は印度教と佛教の混合時代である。

第一期即ち阿蘭羅陀補羅時代の實例の第一はツパラマ塔（第七六一圖）で、傳説によれば西暦前二百五十年頃、天愛帝須が佛教に歸依してこれを建てたと云ふから、蓋し錫蘭最古の塔と云ふべきである。説の眞僞は不明であるが、これは塔身の直徑三十一尺の小塔で、基壇の高さ十一尺、全高五十有餘尺であるから、既に餘程比較的丈けが高くなつてゐる。塔の周圍に四重の列柱がある、其の總數百八十四本であつたと云ふ。

第二期はルワンウェリの大塔（第七五六・七五七・七五八圖）でこれは有名なるダタガーマニ王（西暦前百六十一年より百三十七年）の建立と稱するものである。其の塔身は直徑約百三十五尺、基壇の最底で直徑百八十尺である。第七五七圖は現在の有様で、半球體の塔身の上部が壞崩し、相輪が全く無いのであるから、其の全形はよく分らぬが、幸に此の大塔の敷地の間に、大さ五六尺の小塔があるので、これに據つて、或る程度まで大塔の頭部の手法を想像することが出來るのである。兎に角全體の釣合ひは、寧ろ丈けの低い方で、第七五八圖は、三段の基壇と塔身の下部とを示したものである。基壇の周圍に列柱は無いが列像がある。左端に見えるのがダタガーマニ王で、其の他は誰であるか分らぬが何れも聖僧である。

次にイスルムニの塔（第七六二圖）も亦たダタガーマニ王の建立と稱するもので、所謂小塔の型に屬するが、ツパラマ塔と較べて見ると、殆ど寸分違はぬ恰好である。其の塔身の肩の細く、從つて四角な露盤が著しく目立つところや筍形の相輪が錫蘭小塔の特徴である。

次が有名なる無畏山の大塔（第七五九圖）である、これはワラガムバフー王が、西暦前八十八年に建立したもので、錫蘭第一の大塔である、否恐らくは世界第一の佛塔であると思ふ。其の巍然として聳えたる形相は、宛然一個の巨岳の如くである。東晉の法顯がこれを見て、高四十丈と記錄に留めたが、彼の所謂四十丈は今日の我が曲尺に換算すれば、約三百二十尺ぐらゐであらう、目測高三百餘尺と見た法顯の眼は素人としては正確である。實際此の塔の塔身の直徑三百二十五尺であるから、基壇の外徑では約三百八十尺ぐらゐはある。塔身はほゞ半球體をなしてゐる、露盤は自分で測つて見たが七十九尺四寸四方、九輪は下端で徑四十六尺六寸であつた。現在九輪は半ば折れてゐるが、地上より折れ口までの高さ二百三十二尺である。元來全高二百七十尺は有つたらうと云ふことである。或る物好きな英國の先生が、此の塔の容積を計算した其の一節に、若しも此の塔に用ひてある煉瓦

を以て高さ一丈厚さ一尺の塀を築いたならば、其の長さはロンドンからエヂンバラに達するとある。即ち約東京から青森までの距離に相當する。これを以て如何に此の塔の巨大であるかを想ふことが出來るであらう。

次にランカラマの塔（第七六三圖）である。これは塔身の徑三十八尺、基壇の底四十五尺七寸五分、基壇の高さは八尺であるが、塔身の上部より以上壞崩してゐるので全高は不明である。これにも周圍に四重の列柱がある。年代は西暦二百二十一年である。

次に祇園寺の塔（第七六〇圖）は、有名なるマハーセナ王が、西暦二百七十五年に建立したもので、無畏山の塔と相並んで互に其の大さを爭つてゐる。塔身の徑三百十尺、基壇の底三百六十五尺、塔身はほゞ半球狀をなし、露盤は七十五尺四方で、現在の總高二百四十五尺であるから、創立の際は矢張り二百七十尺ぐらゐであつたのであらう。無畏山の塔よりは餘程壞崩が甚しいので、一寸見ると天然の丘陵のやうに見えるくらゐである。

次にミヒンタレの塔であるが、此處は阿兎羅陀補羅の東方六七哩を距て、昔阿輸迦王の王子摩哂陀の道場であつたので、マヒンダの名が轉訛して今はミヒンタレと云ふのであると云ふ。小丘の半腹に幾個かの大小の塔があるが第七六四圖は其の一小塔である。其の形は第七六一及び七六二圖と同型であり、周圍に二重の列柱がある。

第一期の實例はこれで終りとして、次に第二期卽ちポロンナルワ時代の實例に移るのである。ポロンナルワの古都は今や千年の大藪林の中に埋沒せられ、猛獸毒蛇の巢窟となつてゐるので、目下其の一部は開拓され、種々なる古跡が發見されたが、其の中に塔が二基ある。第七七〇圖は其の一で、ランコート塔と云ふ。直徑百八十尺ばかりの大塔であるが、其の形式は第一期の大塔と殆ど同樣で、只だ基壇の中に幾個の僧房を穿つた手法が變つてゐるくらゐなものである。年代は多分プラクラマ・バフー王（西暦一一五三——一一八六）の時であると考へられてゐる。

第三期は佛敎が衰へ印度敎が混入して來り、歐人勢力を得て國威衰頽の時であるから、最早や大伽藍大塔の建立は止んだのである。從つて重要な實例に乏しいが、こゝに第七七八圖は、カンデーの有名なる佛牙殿ダラダ・マリガワ（Dalada-Maligawa）の傍に在る小墳墓である。其の形式はなほ二千年來の第一期の塔と殆ど同型であり、強ひて異なる點を求むれば、基壇の繰形が少しく變化したと云ふくらゐである。

要するに錫蘭の塔は、中印度の塔の原型を最も忠實に傳へ、二千餘年來今日に至るまで最も忠實にこれを保存し來つたものである。勿論なほよく精査したならば、或は他の異型の塔が發見されるかも知れないが、今日の場合は錫蘭塔が古來變化なしに唯一の型で押し通したと云ふ奇蹟を認めねばならぬのである。

第四　緬甸の塔

錫蘭に次で、中印度のスツーパの型を最も正しく承け繼いだものは緬甸の塔である。

緬甸人は所謂西藏緬甸人種で、蒙古種に屬するのであるから、其の容貌骨相すべて我が日本人に酷似してゐるは言ふまでもなく、其の單綴語の言葉の節々に於いても我が日本の言葉に類似の點が少くない。勿論古來小乘佛敎

の國で、其の信仰の篤いことは實に驚くべきものがある。傳說によれば、中印度摩揭陀國の亞輸迦王がソノ（Sono, Thuuna）、ウタラ（Uttara）の二人を遣はして佛敎を弘布せしめたので、二人はマルダバン灣より上陸して、タトーン（Thaton）に落ち著き、こゝに佛刹を創めたと云ふ。又西曆四百年頃には、印度のブダ・ゴシャ（Buddha-Gosa）が、錫蘭から此の地に來たと云ふ。兎に角古來佛敎一點張りで今日に貫徹し來つたのである。

緬甸の歷史は頗る複雜であるから、こゝにはこれを詳述しない。元來此の土地には古より小邦分立して、幾度か王朝が更迭して來たのであるが、就中最重要にして且つ建築との關係深きものは、パガーン（Pagan）の王朝である。パガーンは上緬甸のイラワヂ河（Irawadi）の東岸にあり、既に西曆第二世紀の始めから王國が出來たが、今のパガーンの古城を建てたのは、第三十三世の王ピイン・ビア（Pyin-Bya）で、西曆八百三十九年（我が仁明天皇承和六年）である。爾來國威頗る發揚して、殆ど緬甸の全部を統一し、歷代の國王が建てた大伽藍や高塔は、今もパガーンの古都の內外に林の如く聳えてゐる。西曆千二百八十三年（我が後宇多天皇弘安六年）に、元の大將相吾答兒が來襲して此の城を陷れ、緬甸は元の屬國となつた。それから幾波瀾の後、千三百六十四年（我が後村上天皇正平十九年）に、アヴァ（Ava）に新王朝が建設せられ、次いで千七百八十三年（我が光格天皇天明三年）に、アマラプラ（Amarapura）に遷都し、最後に千八百五十七年（我が孝明天皇安政四年）に、マンダレー（Mandalay）に遷都したが、明治十八年全く英國の領土となつたのである。

さて緬甸の佛塔の建築談に移るが、緬甸では佛塔のことはパイヤ（Paya）と云ふ、これは佛陀（Buddha）の轉訛であると云ふが如何にや。パイヤに又二種ある、一をセチ（Ceti）と云ふ、これは印度の（Chaitya）の轉訛であると云ふが、これも自分にはまだ合點がゆかぬ。セチと云ふのは單獨に聳え立つ塔で、其の內部は充實してゐるものである。二をカラギャウン・カン・パイヤ（Kalagyaung-Kan-Paya）と云ふ、これは塔の基壇が發育して一箇の堂となり、其の中に佛像を安置し、上に塔身を戴くものである。卽ちセチと稱するものは、中印度又は錫蘭の古代スツーパの型をほゞ純正に保持し來つたものと見ることが出來る、從つてこれは古式の緬甸塔と見るべきである。カラギャウン・カン・パイヤは半佛堂であるから、これは後代の型と見るべきである。但し緬甸の佛堂は、パイヤウート（Payawut）と稱して、自ら別種の型を成したものである。

次に塔の實例を列記して見よう、然し緬甸の塔は其の數實に無算である、全國到るところに一種の尖つた緬甸式の塔が林の如く幷んでゐるので、實列は殆ど多きに苦しむ有樣である。こゝに擧げるのは、其の最も有名なもので、同時に緬甸塔の標本とするに適するもの十基ばかりである。

先づセチの類に屬するもので、第一にパガーンの古塔を擧げる（第八二四圖）。これは壘々たるパガーンの遺趾の一つで、無名の小塔であるが、型は最も古い。煉瓦を以て築き上げた輪廓は、中印度の鹿野苑の塔などにも似てをれば、相輪の邊は錫蘭風にも近い。四方に龕子を附けたところは、既に純正のスツーパの意味を離れてゐるが全體に於いてはセチの好例であり、特に中印度及び錫蘭との連絡を示す點が面白い。年代は不明であるが、パガーン初期のものとすれば、西曆第九世紀頃と見て差支ないと思ふ。

次にラングーン(Rangoon)市のシュウェダゴン(Shwedagon)は、緬甸第一の大塔で、世界に高名を轟かしてゐる東洋の奇觀である（第八二七圖）。此の塔の由來に就いては面白い傳說があるが、塔內に釋迦の毛髮八本、其の他貴重なる遺物が藏められてゐると云ふ。創立は不明であるが、歷代の王や國民が、時に修補又は增築してだんだん其の高さを加へ、西曆千七百七十六年に今の高さになつたのが、直立三百七十尺、基周千三百五十五尺、形は宛然鈴を置いたやうであり、基壇、塔身、相輪が連續せる曲線の輪廓を畫きつゝ次第に細くなつて一點に終る。これが緬甸式の塔の通性で、全く特殊の樣式をなしてゐる、此の塔の本名は(Shwe-Ti-Kumbha-Ceti)と云ふ。總て緬甸の塔にシュウェの頭語が附くのが多いが、シュウェは黃金の意であり、塔は黃金で塗るものとなつてゐる。シュウェダゴンは千七百七十四年に改鍍され、西曆千八百三十四年、千八百七十年、千八百九十三年等に改鍍されてゐるが、一回の改鍍に要する黃金の價は數十萬圓に達するのである。現在の相輪は西曆千八百七十一年に、ミンドーン・ミン王 (Mindon Min) の寄進にかゝり、金銀の寶石を以て飾つたもので、七十萬ルービーの價であると云ふ。以て緬甸人の佛敎に對する信仰の程度を知ることが出來る。

次にペグー市 (Pegu) のシュウェマウダウ (Shwemandaw) （第八三〇圖）はシュウェダゴンに次ぐ名塔で、八角の基壇の一邊百六十二尺、全高三百二十四尺である。此の塔の創立に就いても奇怪な傳說があるが、要するに西曆五百七十三年（我が敏達天皇二年）ペグーの都城が創建されたとき、此の塔も改修されたと云ふ。今日の形に成つたのは第十六世紀の始め頃だと云ふが、其の手法は、殆ど全くシュウェダゴンと均しいと云うても差支ないくらゐである。

プローム (Prome) のシュウェサンダウ (Shwesandaw) も、ほゞ上記のものと同型で、高さ百八十尺、基壇の周圍に八十三の鍍金の龕子があるのが異例である。例の如く奇怪な傳說があつて、創立不詳であるが、西曆千七百五十三、千八百四十一、千八百五十八年等に修繕されて今日に及んでゐる。

ラングーン市の中央なるスーレー塔 (Sulay) （第八三一圖）も、由緒貴き美塔である。殊に其の八角のプランで、恰好よく相輪まで上つて行く邊は珍らしい型である。

マンダレー市 (Mandalay) の東北郊、にラウカ・マラゼン塔 (Lauka-Marazein)、又クトーダウ塔 (Kuthodaw) と稱する珍建築がある。これは緬甸最後の王チバウ (Thibaw) の父君なるミンドーン・ミン王が西曆千八百五十九年に建立したもので、中央なる大塔（第八三二圖）を繞つて、三重の小塔が駢列してゐる、小塔の中には大理石の碑があり、碑の兩面には一切經が刻してある。碑の數は七百二十九であると云ふが、俗に四百五十塔と稱してゐる。塔の形に就いては特に記すべき程のことは無い。

アヴァと相對してイラワヂの北岸に位するサゲーン (Sagaing) の西南郊に最珍奇なる塔がある。コンムダウ塔 (Kaunghmudaw) と云ふので、西曆千六百三十六年にタド・ダンマ・ラージャ王 Thado-Dhamma-Raja が建立したと云ふ。一見中印度の古式其の儘で、餘程古い創建に屬するが如くに見える。殊に相輪が極めて微小であるので人をして異樣の感を起さしむる、何故に斯くの如き形が現はれたかはよく分らぬ。

セチに屬する塔の例はまだ無數にあるが、形式手法皆大同小異であると思へば澤山である。マンダレー市のビエニー塔は、其の一例として見るべきものである。

次にカラギャウン・カン・パイヤに就いて其の例を求めると、これはパガーンの舊趾に少からず見受けるが、現代の實例は皆セチを中心としてゐるので、カラギャウン・カン・パイヤの方は少い。實例の第一は、阿難陀塔(Ananda)である。これはキャン・イッタ王(Kyan-Yit-Tha)(西暦一〇五七——一〇八五)の建立した二十三の大塔の首位を占むるもので、塔の基壇が發達して四角な佛堂となり、四方各突廊がある、中に四方各高三十餘尺の佛像がある、塔身は高く延びてやゝ佛陀伽耶の塔の如く、又印度教建築のシカラ(Sikara)にも似て來た、全高百八十尺、大さ突廊の外端にて二百八十尺である。

第二例はアラウン・チ・タ王(Alaung-Tsi-Tha)(西暦一〇八五—一一六〇)の建立にかゝるタット・ピンニュ塔(That-Pin-Nyu)で、大體前者によく似てゐるが、これは明かに二層の佛堂となり、堂の屋根に塔を載せた形となつてゐる。前面入口に突廊を出し、中に巨像を安置してあり、全高は二百一尺に達する。第三例はナラパヂ・チ・タ王(Narapadi-Tsi-Tha)(西暦一一六七—一二〇四)の建てた八大伽藍の一なるガウダパリン塔(Gaudapalin)で、これは前者と非常によく似てゐる(第八二五圖)。此の塔の落成したのは、次の王ジャヤ・シンハ Jaya-Shimha (Zaya-Thinga)(西暦一二〇四—一二二七)の時である。此の外に同王の建立した、ボーヂ塔(Baudi)は佛陀伽耶の模倣と覺しく、下層の中に佛像を安置し、上層に五基の塔を建ててゐる。

此の外パガーンの故跡で、ナガヨン(Nagayon)、プンキン(Pumpkin)、マヌハ(Manuha)等の塔は何れも見るべきもので、形式手法ほゞ同樣である。パガーン以外ではマンダレー、アマラプラ等に近代の大建築があるが、多くは手法著しく劣等のものに成つた。但しマンダレーのアラカン塔(Arrakan)の如きは面白いもので、佛堂の上部が四角のピラミットになつてゐる。

緬甸の建築は、何によらず屋根を段層形として、上に尖らす傾向があるので、佛塔ならぬ建築も、外觀佛塔と見えるものが多いのである。例へばパイヤサット(Pyathat)と稱する木造の七重九重等の建築、又はパイヤウート即ち佛堂などは、形の上から見て、必然塔から出たものたることを示してゐる。

要するに緬甸の塔は、元來中印度及び錫蘭の塔の型を傳へたもので、おひ〳〵變化してシュウェダゴンの如き一種の鈴形となり、緬甸式を大成した。

さて又一方には、漸次に變化して塔に佛龕を生じ、佛龕が佛堂となり、塔身が退化して屋根の寶頂のやうになり、終にカラギャウン・カン・パイヤを大成するに至つたのであると思ふ。

第五　暹羅及び老撾の塔

暹羅、老撾の塔は緬甸と同系であるが、又多少の相違がある、印度の本場を距るの遠きに從つて、漸次に形式の變化し行く有樣は興味ある現象である

餘談に屬する嫌はあるが、序でに暹羅の歴史を手短かに述べて置く。元來暹羅の古代史は明瞭でない、兎に角太古土著の蠻民が、今の湄南河（Menam）の流域にをつた、漢人の所謂扶南國がそれである。其の後印度より優勢なる移民が來てこれを征服し、瀾滄江の水域を丼領したのが、卽ちクメール（Khmer）と云ふ民族で、此の事蹟は梁書扶南傳にも見え、それは微國の混填なるもの攻めて扶南の女王柳葉を下し、これと婚して七子を生み七邑の王たり、范蔓の世に四隣十餘國を併せて漸く大となると云ふのである。

其の後タイ人種が北から侵入した、これは西藏緬甸種で、第十世紀の頃に老撾、暹羅の二族に分れ、第十四世紀の半に暹羅人はメナムの平野を平定して、都をアユチヤ（Ayuthia）に奠め、暹羅國を創建した。其の後西曆千七百七十一年に緬甸に亡ぼされたが、千七百七十八年に漢人鄭昭がこれを再興し、バンコック（Bankok）に都して新王國を創め、千七百八十六年に清朝の封冊を受けたのである。

暹羅に佛敎の傳來したのは、功德鎧（Gunavarman）が西曆四百十年に錫蘭から林邑に入つて布敎したのを嚆矢とすると云ふ。當時の林邑は、今の暹羅の領土をも含むと云ふのである、其の後四百八十年には、僧伽鎧（Sanga Varman）が扶南に小乘を弘めたと云ふ。其の後第六世紀の中頃には、眞諦（Parmarha）が扶南に大乘を弘め、第七世紀の中頃には、那提（Punya-Udaya）が眞臘に大乘を說いたとある。眞臘は卽ち東甫塞であるが、此の時の眞臘は今の暹羅の領土をも丼有してゐた。こんな工合で暹羅地方は古へより佛敎が隆盛であり、印度敎も混在してゐたが、第十二世紀以來は終にこれを驅逐したと云ふ。目下最も熱心なる佛敎信徒として暹羅人は世に知られてゐる。

さて暹羅の佛塔（Phra）は、伽藍卽ちワット（Vat）の中心となるべき最重要なもので、其の形式には二種あること猶ほ緬甸に於けるが如くである。第一をフラ・プラン（Phra-Prang）と云ひ、第二をフラ・セヂ（Phra-Cedi）と云ふ。フラ・プランと云ふのは暹羅特殊の塔で、第八四二圖の向つて右手にあるやうな形である。勿論中印度のスツーパから出たものであるが、これは例の佛堂化した性質のもので、下に複雜な「くり形」から成る基壇があり、其の上には砲彈の形の塔身が立つのであるが、其の基壇と塔身の間の邊に、正面に龕子樣の室があつて扉を備へ、中には佛像が安置してある、他の三面にも矢張り龕子がある。塔身は細かな段層から成つて、各層の輪廓に角が簇生してゐるので、恰も塔身に深く刻まれた縱線があるやうに見える。其の體裁は殆ど印度敎のシカラ（Sikara）のやうである。相輪は比較的振はない、多くは九輪が無く、只だ水煙類似の飾具が冠せられるばかりである。

フラ・セヂの方は中印度直傳の塔で、錫蘭、緬甸と同工異曲である。第八四二圖の左手に見えるのが其の標準の形で、緬甸のセヂと酷似してゐる。全體に於いて非常に細高く、相輪が殊に鋭く尖つてゐる。これは內部に舍利を藏するのが本義であるが、其の舍利はしば〳〵地下室に藏せられ、祕密の通路に由つて此の室に達するやうになつてゐる。

實例は緬甸と同樣に到るところに夥しいが、併し餘り古いものは無いやうである。タイ人種が北方から侵入して來て始めて造つた都城は、スコタイ（Sukothai）又スコダヤ（Sukhodaya）と云つて、メナム河（湄南 Menam）

の上流にあるが、こゝには最古の實例があると稱せられてゐる。併し未だ其の詳細なことを知らないが、ワット・ジャイ（Vat Jai）には一種やゝ破格なフラ・セヂの實例があると云ふことである。アユチャは三百餘年間の王都であつただけに澤山の遺物がある。フラ・プランやフラ・セヂの半破壞したものが、荒廢したる伽藍の内に存在してゐる。ワット・タ・タオ（Vat-Tha-Tao）やワット・フ・タイ（Vat-Phu-Tai）などは顯著な例である、

バンコックには、更に新しい實例の觀るべきものがある、第八四三圖はワット・チン（Vat-Ching）で、極めて壯大なる近代的手法を竭したフラ・プランである、スコダヤにはワット・シサヴアイと云ふ古塔があるが、これもフラ・プランの一種である、此の多澤山の實例があるが今は述べない。

總じて暹羅の塔も亦た緬甸の塔の如く、尖頭が必ず細く鋭いが、此の手法は塔以外各種の物件に適用せられるところが頗る面白い。佛像の頭、建築的裝飾物件、其の他みな然りであるが、こゝに注目すべきことは寺院の公印である、木或は象牙製であるが、其の形は殆ど塔の上部と同じであることを見るのである。

老撾人は元來暹羅人と同種の民族であるが、今雲南の南境、佛領東京及び安南の西境、暹羅の東北境にをり、瀾滄江の流域を占めてゐる。古へ哀牢國として知られ、今でも安南では哀牢と呼ぶ、現今佛國の保護國で、域内を十四省に分ち、首府はルアン・プラバン（良巴氷、Luang-Prabang）で、同名の省に在り、瀾滄江の上流に沿うてゐる。國の宗教は矢張り純佛教である。

老撾の文化の程度は、暹羅より更に低いのである、從つて其の建築も暹羅よりは劣位に在る。佛塔に關しては未だ詳細なることを知らぬが、數種の報告より推考したところでは、暹羅と全然同型に屬するものとは云へぬ。フランシス・ガルニエー氏（Francis Garnier）の印度支那探檢旅行記（Voyaga D' Exploration en Indo-Chine）は有益な著書であるが、此の中に見えたる老撾の佛塔中には頗る面白いものがある。

第八五〇圖は老撾の中部ウィエンシャン（Vien Chan）の故跡にあるルオン塔（Tat Luong）で、これは老撾に於ける最も有名な塔だと云ふ、二重の四角な壇の上に、比較的低い塔身が建つてゐるが、プランが圓くなくて、矢張り四角であり、上に老撾式の相輪がある、上成壇の周圍には二十八基の小塔が圍繞してゐる、總高百尺と云ふので、其の規模の小ならぬを知ることが出來る。此の塔は、要するに中印度のスツーパの原型から變化した形跡が甚だ明瞭である。

第八五一圖は、同じく老撾のショムヨンの塔（Tat de Chom Yong）であるが、如何にも奇妙な形である、塔身から相輪へ繼ぐ工合は、緬甸暹羅式と見られぬでは無いが、基壇が鼓形に中央で細く絞られてゐるところは、支那日本の須彌壇に似てをり、全體の調子が西藏臭く感ぜられるも妙である。

第八四八・八四九兩圖は佛領東京の、東洋學院（Ecole Francaise d' Extreme-Orient）の聚珍館に藏せられたる老撾の小塔である。大體の輪廓が三角形になつて、上に尖るところは緬甸型と見られるが、第八四九圖は却つて三重塔、第八四八圖は二重の塔と見られる。斯くて後印度即ち印度支那型の塔と、支那型の塔の連絡が、此の間に發見されるのは實に興味ある現象である。

終りに老撾の僧の墳であるが、これも意匠として頗る面白い、基壇の上の塔身の輪廓が豐滿なる鈴形をなし、其の上に露盤、請花があり、太い相輪の柱が其の上に立つて頂に大なる寶珠が冠せられてゐる。

要するに老撾の佛塔は、緬甸遏羅の系に屬するには相違ないが、やゝ統一を缺き、且つ一歩西藏乃至支那に接近してゐるやうに思はれるのである。

第六　東甫塞（眞臘）占城及び爪哇の塔

遏羅老撾から更に東に進んで亞細亞の極東に到れば、こゝに東甫塞、占城及び爪哇の一部がある、其の塔は遏羅式に似て又別に一派をなしてゐる。

東甫塞は漢人これを甘孛智、澉浦只、柬埔など唱へ來りたるが、古へは眞臘國と唱へた。元來東甫塞の故國は印度のパンジャブ地方であるが、何時の頃にか今の湄南河より瀾滄江に亙る平野に移住し來つた。即ち前章に述べたクメールと云ふ民族で、故國の名を其のまゝ襲用して東甫塞國と稱したといふ傳說もある。漢の扶南國が即ちこれであるが、隋唐以後は眞臘國と稱せられてゐる。都城は第十世紀に今のアンコル・トム（Ankor Thom 大城の義）に建設され、耶輸陀羅城（Yaodharapura）と云つて、規模の大と建築の美とは東洋第一と云うても差支ないくらゐであつた。其の後一たび元の征服するところとなり、次いでタイ人種なる遏羅國が、湄南河の流域に興つて眞臘を壓迫したので、第十四世紀の終に此の帝都を棄て、漸次國勢萎縮して終に佛國の保護國となつたのである。

東甫塞人は元來印度種で、遏羅緬甸人の如く蒙古種でないから、其の藝術も亦た餘程印度的である。宗教は元來佛教であり、それは佛鳴（Buddhagosa）が始めて傳へたと云ふ。併し遺跡の研究によれば、昔は印度教であつたやうである。隨つて古代の塔も佛塔よりは寧ろ印度教のシカラに近いものであつた。後世遏羅の感化等に由り、其の宗教が佛教となると同時に、塔の形も大いに遏羅式に近いものとなつたのであると思ふ。

東甫塞の古代の塔の絕好の標品は、アンコル・ワット（Ankor Vat 王城寺の義）と云ふ大伽藍の塔に如くものは無い。此の伽藍はアンコル・トムの南郊にあり、第十二世紀の建立にかゝる驚くべき珍建築である。其の詳細は今は述べないが、此の寺の中心に聳えてゐるのが一基の高塔で、其の周圍の廊の四隅に各塔が疊立してゐるので、都合五基の塔が并立することになる（第一〇〇四圖）。此の塔の性質は寧ろ印度教のシカラに近いが、其の手法を觀ると、却つてアユチア等に見受ける遏羅のフラ・プランと類似の點が多い、即ち塔身が細かな段層から成り周圍に角が簇生してゐるのである。

次にコンポン・チャム（Compong Cham）のワット・ノコル寺（Vat Nokor）の佛堂は、本來の塔ではなく、又頂上の塔も後世の修築であるから塔の最適例ではないが、これ等はカラギャウン・カン・パイヤと餘程類似の性質があるのが面白い、畢竟同型に屬するのに相違ない。

又、同地の僧侶の墓であるが、これ等は近代東甫塞の型であり、塔身が細高い鐘形となり、全體に於いて細く

尖つた形である。これ等も總て緬甸遮羅の感化を示したものである。

次に首府フノンペン（Phnom-Penh 南旺または南榮）に於ける近代の塔であるが、大體に於いて遮羅の墓とよく似てゐる。

要するに東甫塞の塔には、中印度のスツーパの原型に近いものは見當らぬ、或ものは印度敎のシカラに似、或ものは緬甸遮羅の塔に似て、更にこれよりも複雜である。

次に占城國は、瀾滄江の下流及び江口附近、即ち今の交趾支那及び安南の南半部に當る地方で、周代の越裳國、秦の林邑、漢に象林郡、後漢以後に林邑、唐に占不勞、又は占波、元史に占八と稱してゐる。其の人種はチャム Cham と云ふので、矢張り印度の方からの移住民であるといふ。古代印度に於いて今のパンジャブ地方に贍波國と云ふのがあるが、即ち占波の故國であるといふ說がある。贍波、占波、占八共に音通でチャンパの音譯である。此の國は古來大越國の安南人と絕えず戰つてゐた、一時は今の順化府よりも遙かに北方まで占領した。日本との關係は、聖武天皇の時、林邑の佛哲と云ふ者が渡來して林邑の樂を傳へ、此の樂は東大寺落慶供養の時に奏されてゐる。又チャンパ縞と云ふ一種の縞布は、日本に傳つて近頃まで世に知られてをつた。

其の後チャムの勢力は漸次に衰へて南方に壓迫され、明の成化中占波國は安南の黎朝の爲めに征服された。轉じて今は佛領となつたが、チャム人は尙ほ若干各地方に散在してゐる。チャム人の遺跡は目下東京の東洋學院で熱心に探檢してゐるが、實に夥しいものである。佛敎伽藍の建築は殆ど東甫塞に近いが、又多少趣を異にし、東蒲塞よりも奇怪なる手法に富んでゐる。

遺跡の最も有名なるは衙莊（Nha-Trang）のポ・ナガル（Po-Nagar ポは尊稱、我が御に當る、ナガルは都又は城の義）である。これに就いては今立派な報告書が出てゐるからこゝには述べない。さて占波の塔の建築を尋ねて見るに、矢張り東甫塞と同じく中印度のスツーパの原型に近いものは見當らない。却つて佛堂の上にシカラ類似の塔が聳えてゐるのである。第八五九圖はヴァン・ツオン（Van-Thuong）の古寺であるが、一見全く印度敎のシカラと同一の型である。但し細部の手法を見ると、塔は明瞭に層を成してをり、外の輪廓が曲線をなしてゐる。即ち印度敎建築の北方式、チャルキヤ式、ドラビタ式の何れにも均しくない。又東甫塞のアンコル・ワットなどとも違ふ、即ち別に占城式が存在する所以である。

爪哇島は昔東晉の法顯三藏の漂著した頃は耶婆提（Yavadvipa）と云ひ、此の時佛敎は甚だ微弱で印度敎等が盛んであつた。島は南北朝に闍婆（Java）、唐に訶陵、元以後爪哇と云ふが、佛敎は印度の功德鎧（Gunavarman）が始めて傳へたと云ふ。古への藝術家は多く印度から行つたので、爪哇古代建築の性質は餘程印度趣味があるが、又一派の流義を立ててゐる。

佛塔の建築に就いてはこゝに絕好の標本がある、それは古へより東洋第一の大古趾として有名なるブロ・ブドル（Buro Budor）である。これは四角の隅に一種の几帳面を取つたやうなプランで、其の一邊の長さ約四百尺、六層の段を成し、每層の周圍に佛龕が幷立して欄の代用をなしてをり、各層の表面には佛傳其の他の精巧無比な

る彫刻が施されてある。第六層の上に更に三層の圓い段があり、段上にはスツーパが繞り立つてゐて、其の中には佛像が納めてある。スツーパの數は下段に三十二、中段に二十四、上段に十六であり、終りに上段の上に中心の大スツーパが聳えてゐる。此の年代はまだ確實でない、或は七世紀に擬し、或は九世紀に置くものもある。

さて塔の型を觀るに、中心の大塔も周圍の小塔も、大體に於いて同樣であり（第八六三圖）、全體に錫蘭塔及び緬甸塔と似てゐる、基壇に蓮座を作り、其の上に美しいS曲線の美塔身を載せ、頂に簡單な高い相輪を冠してゐる。中心塔の高さは約四十二尺、周圍の小塔は高さ十三尺に過ぎないが、其の意匠は餘程變つた珍らしいものである。

六重の各層周圍にある佛龕の裝飾的手法としてまた塔が澤山ある。周圍の浮彫の中にも亦た種々なる塔が表はされてゐる。第八六一・八六二圖は壇の周圍に壘々として重なり合つてゐる龕子であるが、頂に小塔が簇々として立つてゐるのを見る。又第八六六圖は、龕子及び浮彫の中に見えたる塔の實例の一である。これを見て如何に塔の種類の豐富であるかを想ふと同時に、なほ更に幾何の新形式を案出するの餘地があるかを語らしむる。而して爪哇塔の形式は、主として中印度のスツーパの原型を踏襲してゐることが分るのである。

吾人は又これ等の實例に由つて、佛に供養の香炉や華瓶の形が塔の型であることを知ることが出來る。又塔の頂部が發達して、終に印度サラセン式のドーム（球蓋）となる經過をも知ることが出來る。これ等の事項は東洋藝術史上に於いて、實に重大なることであるが、おのづから別問題に屬するから、他日別にこれを說くことにするのである。

第七　健駄羅の塔

健駄羅（Gandhara）は、印度パンジャブ州の西北隅、インド河とカブール河の合流する邊の地域に於いて、古への希臘沙布羅、即ち今のペシャワルを首府として、一時隆盛を極めた國である。

此の國を建てた民族は、即ち支那の所謂大月氏で、其の建國の年代は、いろ〳〵學者に由つて說を異にするが、大凡西曆前百二十八年頃と考へられてゐる。彼は支那內地からだん〳〵西進し、終に葱嶺を越えて、今の露領土耳其斯坦に進入し、當時此の地方及び西北印度を領有してゐた大夏、即ちバクトリアを征服して一大國を建て、一時はパンジャブの全土、及び印度河の河口の邊までも領有したが、印度の笈多朝の爲めに印度の境外に擯退せられ、北からは嚈噠の爲めに壓迫せられて、終に滅亡したのが西曆五百年頃と推定されてゐる。

其の全盛時代は、大月氏の貴霜朝の迦膩色迦王（Kaniska）の時であると信ぜられ、其の年代は異說多端であるが、大凡西曆第一世紀乃至第二世紀と信ぜられてゐる。大月氏は熱心なる佛教徒で、其の藝術は希臘の殖民なるバクトリア人の感化と純印度との影響を受け、更に隣邦なる安息や薩珊朝の波斯の刺激を受けたので、所謂雷つて唱へられた如く、健駄羅式又は希臘印度式と云ふ一種奇異なる樣式を成した。此の樣式に關しては重要なる幾多の學說があり、東洋藝術史界に於ける最も興味ある問題となつてゐるが、別問題であるから今はこれに論及

しない。

さて健馱羅に於ける塔は其の遺跡がおひ〳〵に發見され、實に夥しい數に上つてゐるが、古への記錄に徵してこれに比定さるべきものも多く發見されてゐる。就中ペシャワルに於ける迦膩色迦の塔は唐の玄奘の大唐西域記に詳述してあるところを以て見れば、「高さ四百尺を踰え、基趾の峙つ所周一里半、層基五級、高さ百五十尺、方に卽ち小堵婆を覆ふを得たり。王因て喜慶して、復た其の上に於いて更に二十五層金銅の相輪を起つ、卽ち如來の舍利一斛を以て其の中に置く」と云ふのである。卽ち五層の基壇の上に塔身を作り、其の上に二十五層の相輪を立てたので、ほゞ其の形狀を想像し得られるが、なほ他の實例より推して、ほゞ原形を復舊し得るのである。先年ペシャワルの郊外に、此の塔の遺趾が發見されたと云ふ報告が發表された。其の他の玄奘の歷訪した塔なども、おひ〳〵分明になりつゝあるのである。

健馱羅の塔の大多數はカルカッタ博物館所藏の小塔の如き形式で、これはユサフザイ（Yusafzai）から出たものである。其の大體は中印度の原型に酷似してゐるが、基壇は圓くなくして方形である。其の表面には希臘的コリント式の柱や、梯形の楣などがあり、其の間に複雜なる彫刻がある。塔身は圓いが、其の胴に幾條かの帶を繞らして幾層かに區別し、各層に佛傳に關する彫刻や、裝飾的文樣を刻してある。塔身の肩の部分には、花瓣が垂れてゐる。露盤の上には九輪があるが、此の九輪は後の修補である。要するに、此の小塔を以て健馱羅式の塔の性質を知ることが出來るのである。

また、ブリチッシ・ミュージァム所藏の、ブネル（Buner）地方（印度河の支流ブネル河の流域地）から發見された塔の彫刻の殘片により、其の塔の形式が殆ど全く前記のものと同じであることが推知される。只だ其の基壇が著しくなく、輪廓も方形でない。

塔の建築の遺跡の數例を擧げて見ると、第一にペシャワルの西方約十里、阿富汗國の境に亙るハイバル（Khyber）峠の中、現今アリ・マスヂット（Ali-Masjid）と稱するところに、絕好の塔の遺趾が數箇ある。第七八二圖は、其の現狀を示すものであるが、これは四角三層の華麗なる基壇を有してゐる。最下層にはコリント式の列柱の中に佛像を入れ、第二層との間に獅子の彫刻を列ねてゐる。第二層はコリント式の列柱の間に拱と楣とを交番に入れ、更に其の中に佛像を入れてゐる。第三層は第二層と同式であるが、拱と楣との順位が第二層の順位と常に交換されて居り、柱もコリント式でなくて、波斯式の動物の柱頭である。塔身以上は全く崩潰して分らないが、蓋しこれ等が最も整備せる健馱羅塔の標本である。

またスワット（カブール河の支流スワット河の流域地）のトプ・ダラ（Top-Dara）の塔で、其の調子は前述のユサフザイ發見の塔に似て四角な基壇を有し、塔身に幾條かの帶を繞らしてゐたことが分る。

更に均しくスワットの上軍王（Uttamsena）の塔に就いては、大體に於いて前者によく似てゐる。此の塔は玄奘三藏も親しく訪問して、これに關する記述を試みてゐる。卽ち大唐の西域記に「嚫揭釐城の西南、行くこと六七十里にして、大河の東に窣堵波有り。高さ六十餘尺、上軍王の建つるところなり。昔如來の將に寂滅せんとするとき

き、もろ〳〵の大衆に告げ玉はく、我が涅槃後島仗那國の上軍王に宜しく舍利を分ち與ふべしと。諸王將に量を均せんと欲するに及び、上軍王後れて來れり、遂に輕蔑の譏有り、此の時天人大衆重ねて如來圓命の言を宣し、乃ち同分に預り持ちて本國に歸り、遺崇を式として率堵波を建つ。側なる大河の濱に大石あり、狀象の如し。昔上軍王大白象を以て舍利を負ひ、歸つて此の地に至りしに、象忽に蹶仆し、因つて自ら斃れ、遂に變じて石となる。即ち其の側に於いて率堵波を起す。」とある。斯くの如き筆法で、西域記所載の塔は今や著々現狀を指摘されてゐるのは頗る興味あることであると思ふ。第七八三圖はパンジャブ州のラワルピンヂの東南十七英里なるマンキャラ（Mani-kyala）の塔である。これは彼の玄奘三藏も訪問してゐると考へられてゐる。法顯三藏の記錄にも但叉始羅即ちタキシラ（ラワピンヂの西北十餘英哩）から東南二日程のところが、佛が其の身を捨て餓虎に供養した地點であると說いてあるが、これ即ちマンキャラで、其の塔は迦膩色迦王が建立したと考へられてゐる。此の塔は大體の形は殆ど全く中印度式で、比較的丈けが低い。第七八三・七八四兩圖に示すところは、細部の有樣であるが、基壇が圓くてコリント式の列柱が其の表面に施され、塔身にも例の帶が繞らされ、其の下層にはコリント式の列柱が今も明かに現はれ、上層には今何物も殘つてをらぬが、定めて或る彫刻、或は裝飾文を以て充塡してあつたであらうと思ふ。

以上の數種の實例から推考すれば、健馱羅の塔は大體中印度の原型によく似てゐる。但だ基壇は多くは四角で時に數層を成し、列柱や拱を以て取扱ひ、彫刻を適用するところ頗る西洋クラシック的趣味を有してゐる。塔身は必ず帶を以て幾段層かに區分され、從つて其の全形は比較的高くなる。而して此の塔身を段層に區劃するの手法は、支那土耳其斯坦より支那に入つて、終に支那的多層塔となつたのであると考へられる。此の問題に就いては、いづれ支那塔の部に於いて尙ほ卑見を述べることにするのである。

塔終

東洋建築の研究（下）完

東洋建築の研究（下）
（上・下編金壹百圓、分賣せず）
定價金五十圓也
價格表定番號五の六〇號

昭和十八年九月一日　初版印刷
昭昭十八年九月十日　初版發行
昭和二十年五月十五日　再版發行（一千五百部）

（日本出版會承認
5340126）

著者　伊東忠太
發行者　草村松雄
東京都麻布區飯倉町六ノ一四
印刷者　稲葉惠一
東京都牛込區早稲田鶴巻町二五〇
配給元　日本出版配給統制會社
東京都神田區淡路町二ノ九
發行所　株式會社　龍吟社
東京都麻布區飯倉町六丁目一四番地
出版會會員番號一三〇〇六番
電話赤坂（48）一六五九番
振替東京六九一〇〇番

東京161　稲葉印刷所　製本・明和印刷株式會社　印刷

997
180

終